たま、ゆらら

作　千葉研之

登場人物

中道房江	主婦
中道正男	長男（真知子の弟）
清水真知子	房江の長女
清水一馬	真知子の夫
由紀	正男の恋人
郁雄	真知子の幼なじみ
リュウコ	あんどんの会会長
マサミ	あんどんの会幹事
ヤヨイ	あんどんの会相談役
タマ	あんどんの会新入り

1

二階建ての古い日本家屋。
舞台正面より上手側の上には、部屋の窓があり張り出た手すりがついている。
舞台正面の中央には、この家の茶の間。まるい卓袱台や古い茶箪笥などがあり、どことなく懐かしい感じを思い起こさせる。
その茶の間より向こうに続く廊下の右に台所、左に二階に上がる階段があり、奥に玄関がある。
茶の間の上手側に、入り口が下手側を向いた部屋があり、ふすまの脇の柱には、「あんどんの会事務所」と書いてある紙が貼ってある。
舞台正面の茶の間から手前に続く縁側と荒れ果てた庭。その庭の下手側には小さな砂場がある。
家の周囲は板塀になっていて、下手には勝手口がある。
三人の、派手な着物を着てはいるが、どことなく身なりの悪い老婆達が茶の間で話し込んでいる。
夕暮れ時。

リュウコ　あたしはだめよ。

マサミ　リュウコちゃんなら大丈夫よ、腰が低いし丁寧だから好感持ってくれるって。

リュウコ　初対面でしょ、恥ずかしいわ、なんて切り出せばいいかな。

ヤヨイ　時候の挨拶でいいんじゃないの、あんまり固く考えないでさ。

マサミ　ありきたりよ、もっとひねったほうがよくない？

ヤヨイ　心に浮かんだことをそのまま表現する、それでいいじゃない。

マサミ　向こうはそう思うかしら。

ヤヨイ　思うわよ。

リュウコ　こう見えても結構人見知りするのよね。

マサミ　さりげなく煙草ある？　ってのはどう、斬新じゃない。

ヤヨイ　変よ。

マサミ　若い男だもの、堅苦しい挨拶よりはいいじゃない。

ヤヨイ　時候の挨拶がどうして堅苦しいの。

マサミ　もっと気軽に行こうよ。

リュウコ　煙草やめたのよ。

マサミ　若い男とたしなむなんていいじゃない。

リュウコ　そりゃそうだけど。

ヤヨイ　季節の話にしない、当たり障りがなくてごく自然じゃないの。若葉の梢を爽やかな風の渡る頃となりました。

マサミ　なにそれ。

ヤヨイ　若しくは涙を誘うように、年の瀬も押し迫り、
マサミ　（ヤヨイの言葉を遮り）季節が変わっただけじゃない。
ヤヨイ　もっともの哀しいほうがいいかしら。
リュウコ　文章にしてどうするのよ。
ヤヨイ　あ、あぁ、若い男なんて久しぶりだからつい。
リュウコ　若い男じゃなくて新入り。それにまだ入ると決まったわけじゃないんだから。
マサミ　いっそのこと単刀直入に切り出すのはどう？
リュウコ　どんなふうに？
マサミ　シボウの動機はなんですか。
リュウコ　面接みたいね、余計緊張しない。
マサミ　面接でしょう。
リュウコ　とは言ってもねぇ。
ヤヨイ　硬すぎるわよ。
マサミ　分かりやすくていいじゃない。
リュウコ　分かりやすすぎるわ、第一動機がなかったらどうするのよ。
マサミ　入りたいって言うくらいだもの、あるわよ。
リュウコ　マサミちゃんの動機はなんなのよ。
マサミ　あたし？
リュウコ　ほら、答えられないじゃない。

マサミ　急に聞かないでよ。
リュウコ　こっちだって急に聞くのよ。
ヤヨイ　（マサミに）なんなの？
マサミ　ヤヨイちゃんは？
ヤヨイ　あたし？　リュウコちゃんは？
リュウコ　ないわよ。マサミちゃんあるの？
マサミ　……。
リュウコ　動機なんてなくてもいいじゃない。せっかく入りたいって言うんだし。
マサミ　分かったわ。でも物好きね、この会に入りたいだなんてさ。
リュウコ　あたし達も物好きって事？
マサミ　そういう事になるかな。
ヤヨイ　あたしも物好きなの？
マサミ　そうじゃない。
ヤヨイ　それっていい事？
マサミ　さぁ。
ヤヨイ　どっち？
リュウコ　どっちでもいいわ、それよりどうするの。
マサミ　若い男よ、あたし達の感覚とは違うわ。
ヤヨイ　リュウコちゃんは何かないの。切り出すのはリュウコちゃんなんだから、リュウコちゃんの言葉がいいわよ。

リュウコ　苦手なのよそういうの。
ヤヨイ　もう来ちゃうわよ。
リュウコ　そんな事言ってもさぁ。
マサミ　火ありますかってのはどう？
リュウコ　だから煙草はやめたって、何度同じこと言わせんのよ。
マサミ　別に吸う吸わないの問題じゃなく、あくまで切っ掛けよ。
リュウコ　はい、なんて出されたらどうすんのさ。
マサミ　その時は断ればいいじゃない。
リュウコ　じゃぁ何のために聞くのよ、よけい変じゃない、もう煙草の話はよしてよ、吸いたくなるしさ。

間

マサミ　遅いわねぇ。
ヤヨイ　ここが分からないのかしら。
マサミ　分かるはずよ。
リュウコ　ヤヨイちゃん。
ヤヨイ　えっ。
マサミ　涎。
ヤヨイ　やだ。（手の甲で拭う）

リュウコ　何考えているのよ。
ヤヨイ　そろそろ来るって予感がしない？
リュウコ　そう？
マサミ　するする。
ヤヨイ　希望を持ちましょう。
マサミ　ヤヨイちゃんの場合持ち過ぎよ。
リュウコ　希望か。
マサミ　何よその絶望した言い方。
リュウコ　希望に希望が持てない。
マサミ　じゃあ絶望したら、きっと希望が持てるわ。
リュウコ　しなくても持っている。
ヤヨイ　早く決めましょう。

勝手口より両手に鞄と紙袋を下げた真知子が入ってくる。
茶の間にいる老婆達に気づき、怪訝そうな顔をしている。

リュウコ　やっぱり無難なほうがいいわよね。
マサミ　若い男なんだから、インパクトのあるほうがいいわよ。
ヤヨイ　どっちでもいいから早く決めましょう。
マサミ　決めないってのはどう。

ヤヨイ　なによそれ。
マサミ　出たとこ勝負。
リュウコ　いいかも。
ヤヨイ　駄目よ。
マサミ　どうして。
ヤヨイ　又逃げられちゃうわ。
マサミ　そんな事ないって。
ヤヨイ　あるわよ、行き当たりばったりでやっていたらおかしくなっちゃって、この間もそれで逃げられたんじゃない。
マサミ　今度こそ気のきいた人で、十分分かってくれるわよ。
ヤヨイ　都合がよすぎるわ。
マサミ　（男ぶりで）お嬢さん方、本日はお日柄もよく、この会に入会するにはもってこいの日和だ。
リュウコ　日は暮れているわ。
マサミ　お嬢さんたちと一緒にあんどんを作りたい一心で、やって参りました。
リュウコ　嘘っぽい。
マサミ　さあ早く、奥の部屋へ行きましょう。
リュウコ　やめなさいよ。
マサミ　さあ、早く。
リュウコ　マサミちゃん！

真知子　あのー。
リュウコ　は、はい。
マサミ　あらやだ。
真知子　こんばんは。
老婆達　こんばんは。

真知子と老婆達見つめあっている。

マサミ　……新入りさん？
真知子　……そうなるのかしら。
マサミ　女？
リュウコ　なんて言えばいいのよ。
真知子　あのー、どちらさま？
マサミ　誰よ、若い男だなんて言ったのは。
リュウコ　マサミちゃんじゃない。
マサミ　だといいねって言ったのよ。
ヤヨイ　しょぼん。

真知子、縁側より茶の間に上がり込む。

真知子　母さん、母さん！　ねぇ、いないの！　（上手の部屋の脇の柱に貼ってある紙を見て）これって……ねえ母さん。
マサミ　母さん？　って事は新入りじゃなくて娘さん？
真知子　……真知子です。
リュウコ　まちこ。あぁ、なんだ真知子さんかびっくりした。
マサミ　あぁ、真知子さんか。
ヤヨイ　なぁんだ。
真知子　ここでなにやっているのよ。
リュウコ　いやなに、房江ちゃんから使っていいって言われているもんで。
真知子　使っていい。
リュウコ　と、申し遅れました、私あんどんの会の会長のリュウコです。こっちが幹事のマサミ、相談役のヤヨイ。まあよろしくお願いします。
マサミ・ヤヨイ　よろしく。
真知子　アンポンタン？
リュウコ　あんどんの会。
真知子　って何？　ボランティア？
リュウコ　あんどんを作る人達。
真知子　はあー、いつの間にか我が家がボランティアの事務所になっている。
……それで？
リュウコ　それで？

真知子　母さんも？
リュウコ　いや。
真知子　他には？
マサミ　私達だけよ。
ヤヨイ　でももうすぐ入りたいって人がやってくるの。
真知子　ここに？
リュウコ　そうここに。
真知子　どういう事よ、もう。

二階より正男が降りてくる。

真知子　なんだ、兄さんいたんじゃない。

無言で台所へ行き水を飲む。

真知子　ちょっと、久しぶりに会ったんだから何か言いなさいよ。

茶の間に入ってくる。

正男　お帰り。

卓袱台の脇に座り、傍らにある新聞を広げて読む。

マサミ　もうちょっと寝ていたらいいのに。

正男　訳の分からない方達があまりにもうるさいもので寝られないんですよ。

真知子　兄さん、このおばあちゃん達。

正男　あんどんの会の人達。

真知子　そうじゃなくて。

正男　母さんに聞いて。

真知子　母さんいないの？

正男　お通夜。

真知子　お通夜？

正男　郁雄のところのばあさん昨日死んだよ。

真知子　嘘、あれは死なないよ。

正男　確かめてくれれば。殊勝な郁雄が見られるんじゃないの。

真知子　いいわよそんな。

正男　居候のおばあちゃん達、お茶を入れてもらっていいですかね。

リュウコ　ああ、すみませんね気がきかなくて。

真知子　何よ居候って、いつからいるの？

マサミ　えーと。

真知子　あ！それあたしの湯飲み、なんで使っているのよ。
ヤヨイ　使っていいって言われたのよ。
真知子　誰によ。
ヤヨイ　房江ちゃん。
真知子　嫌だぁ。
ヤヨイ　気に入ってったのに（真知子に差し出す）
真知子　もういいわよ。
ヤヨイ　いいの？
真知子　居候って、ボランティアだけならまだしもなんで家に居候がいるのよ。
　　母さんが決めたの？　おばあちゃん達自分の家に戻ったら。
リュウコ　家？　あぁ家ねぇ。
真知子　どこなのよ、連絡してあげるから。
マサミ　家はここかな。
真知子　ここかなって、ちょっと。
マサミ　房江ちゃんがいいって。
真知子　兄さん説明してよ。
正男　母さんに聞いてください。
真知子　もう、頼りないわね、って、まさかあたしの部屋で寝泊まりしている訳じゃないでしょうね。
正男　（上手の部屋をあごでさす）

真知子　（上手の部屋を見る）事務所兼宿泊場所って事？　母さんが決めたの？

正男　そう。

真知子　そうって。

正男、やおら立ち上がる。

真知子　どこ行くのよ。

正男　気が変わった、今日はもう帰る。

正男、二階に上がる。

真知子　帰るってなによもう。

マサミ　今日は吊り棚を直すんじゃなかったのかい。

リュウコ　正男さんお茶入ったわよ。

マサミ　吊り棚直してよ。

リュウコ　お茶飲まないのかい。

ヤヨイ　あたしそれ貰おうかしら。

真知子　……。

リュウコ　ご機嫌斜めだね。

マサミ　直してくれるって言ったのに。

真知子　吊り棚って父さんの部屋の？
リュウコ　マサミちゃんが吊り棚に写真を飾りたいんですって。でもね、ちょっとぐらぐらしているものだから、正男さんに頼んだら直してくれるって。
真知子　嘘。直すはずないわ。
ヤヨイ　でも、やってくれるって言ったのよ。
マサミ　写真飾れないのかしら。
真知子　……ねぇ、前はどこに住んでいたの？
リュウコ　あちこち。
真知子　あちこちって、家族はいないの？
リュウコ　いないよ。
ヤヨイ　そんな所に立ってないで、こっち来て座ったら。
真知子　座ったらって、ここはあたしの家なのよ。

房江が玄関より入ってくる。

房江　ただいま、遅くなっちゃったわね。
真知子　母さん！
老婆達　お帰り。
房江　あら真知子、来ていたのかい。
真知子　もう、あんなに電話で喋ったじゃない。

房江　本気なの？
真知子　あとは向こうの判子だけ。それであたしたちはおしまい。

房江、茶の間にやってくる。

房江　あらあら、随分打ち解けているみたいね、おばあちゃん達、家の娘の真知子です。本人いわく出戻りらしいけどよろしくね。
真知子　そんな紹介しないでよ。
房江　お前今そう言ったじゃないか。
真知子　それはそうだけど、そんな事よりこのアンポンタンの会ってなによ、ちゃんと説明してよ。
リュウコ　あんどんの会。
房江　ボランティアの方々。父さんの部屋にいるから邪魔しちゃだめよ。
真知子　誰が邪魔するものですか。そっちこそ邪魔しないでほしいわ。せっかく母娘でひっそりと暮らそうと思っていたのに。
房江　晩御飯ね、正男の好きなうなぎ買ってきたから、真知子も手伝って。
マサミ　えっ、うなぎ。
房江　おばあちゃん達も好きでしょう。
リュウコ　うなぎかぁ。
マサミ　早く食べよう。

ヤヨイ　食べよう。
房江　大きいの買ってきちゃった。

正男、鞄を持ち二階より降りてきて台所へ行く。

房江　正男、今晩うなぎよ。
正男　いらない、もう戻る。
房江　いらないって、だって今日泊っていく日じゃないのかい。
正男　昨日から寝てないんだ、うるさくて寝れやしない。
マサミ　吊り棚直してよ。
房江　そう。

茶の間の電話が鳴る。

房江　はいはい、（受話器を取り）はい中道です、あらさきほどは、え、あらやだほんとだ、何やってんでしょう。すみませんわざわざ今行きます。ご丁寧にどうも（受話器を置く）やだよもう。
マサミ　どうしたの、何かあった？
真知子　母さんどうしたの？
房江　うなぎ忘れてきちゃった。

マサミ　え！どこに？

房江　ご焼香上げるとき買い物袋持っていちゃ邪魔でしょう、玄関先に置いたままだったわ。そうそう真知子、郁雄ちゃんのおばあちゃん亡くなったのよ、お前も随分可愛がってもらっただろう。

真知子　兄さんから聞いた。それより買い物帰りに行かないでよ、どういう神経しているの。

房江　郁雄ちゃんのおばあちゃんだからいいかなと思って。

真知子　そういう問題？　死者を冒涜してない？

房江　真知子も行ってきなさい。

真知子　嫌よ、そんな気分になれない。

房江　郁雄ちゃん会いたがっていたわよ。そうだ、ついでにうなぎ取ってきてよ。

真知子　なんであたしが取りに行かなけりゃならないのよ。

房江　又歩くと思うと疲れちゃって。

リュウコ　房江ちゃん。あたし取りに行ってくるわ。

房江　あら悪いわ。

マサミ　食い気が先か。

ヤヨイ　来たらどうするのよ、待ってなくちゃだめじゃない。

リュウコ　お腹空かない？

ヤヨイ　空いた。

リュウコ　決まり。
マサミ　（ヤヨイに）来たらお相手していて。
ヤヨイ　マサミちゃんは？
マサミ　年寄りの一人歩きは危ないでしょ。一緒にうなぎを取りに行って来る。
ヤヨイ　一人で待つのは嫌よ。
リュウコ　大丈夫よ、みんないるじゃない。
ヤヨイ　じゃあ、あたしとリュウコちゃんで行くから、マサミちゃん待っていてよ。
マサミ　だったら、あたしとヤヨイちゃんで行くからリュウコちゃん待っていてくれる？
リュウコ　そんな。
房江　（真知子を見る）
真知子　嫌だって。
房江　三人で行ってきたら。
ヤヨイ　いい？
房江　新入りさん来たらお相手しておくわ。
マサミ　本当？
房江　ええ。
リュウコ　じゃあお言葉に甘えて。
ヤヨイ　行こ行こ。

マサミ　うなぎ、うなぎ。
房江　気をつけてね。
リュウコ　三人いれば大丈夫。
房江　玄関先よ。
リュウコ　任せておいて。

三人、玄関より出ていく。

真知子　何なのあの人達。
房江　いいじゃない賑やかで。
真知子　分からないなぁ。

正男、台所から縁側にきて、靴を履き出ようとする。

真知子　兄さん、まだ話は終わってないわ。
正男　何の話だよ。
真知子　なんでもう帰るのよ。
正男　そういう事。
真知子　そういう事って。
房江　いいのよ、正男も忙しいんだから。

真知子　いっつもそうじゃない。
正男　しょうがないだろう。
真知子　自分のことばかり。
正男　……。
真知子　久しぶりの兄弟の再会なんだから盛り上がろうよ。
正男　やっていろ。
真知子　なんでそうやって避けるのよ。
正男　避けてない。
真知子　避けている。部屋借りなくたってここから通えるじゃない。
正男　それを決めるのは真知子じゃなくて俺。
真知子　何よその言い方。母さん一人っきりにして。
正男　あんどんさんがいます。
真知子　あんなのだめよ。
正男　そうだな。
真知子　昔から自分は関係ないって顔して。
房江　真知子、いいんだよ。
正男　自分の都合だけで物言うのやめろ。
真知子　それは兄さんの方じゃない。
正男　もう行く。
真知子　行くんだったら吊り棚直してから行ったら。

正男　なんでそうなるんだよ。
真知子　約束したんでしょ。
正男　向こうの思い込みさ。
房江　そんな約束したの？
正男　するわけないだろう。
真知子　したら御立派頭が下がるわ。
正男　いい加減にしろよ、急に戻ってきたと思えば説教？　自分のことは棚に上げてよく言えたもんだな。
真知子　棚？　そうよ棚よ。アンポンタンのために直してあげたら。
正男　しつこいぞ。
真知子　自分のことで頭が一杯のお兄様、いかがかしら。
房江　やめなさい二人とも。久しぶりに会ったんだから喧嘩なんかしてないで、お互い優しくできないの。
真知子　……。
正男　……。

老婆達が勝手口より戻ってくる。

マサミ　いやぁ房江ちゃん、うなぎのお家ってどこなのさ。
房江　あら、郁雄ちゃんの家よ。

リュウコ　それはどこなのさ。
ヤヨイ　早く食べたい。
真知子　分からないで出て行ったの？
マサミ　リュウコちゃん知っていると思ったのよ。
リュウコ　マサミちゃん率先して行きたがっていたじゃない。
ヤヨイ　早く食べたい。

正男、構わず出て行こうとする。

房江　行くんだったら案内して頂戴。
正男　なんでだよ。
房江　駅に行く途中じゃないの。
正男　そりゃそうだけど。
リュウコ　連れてって。
マサミ　いこいこ。
ヤヨイ　早く食べたい。
正男　（渋々）分かったよ。
ヤヨイ　やったー。
正男　くっつくな、離れて歩けよ。
マサミ　なに照れている。

正男　照れてない、嫌なだけだ。
マサミ　心にもないことを。
房江　頼んだわよ。

老婆達、正男に寄り添うようについて行く。

真知子　大丈夫かしら。
房江　正男がいるから大丈夫よ。テーブル片付けて頂戴。
真知子　はいはい。

房江、台所に行く。
真知子、茶の間を見渡す。
房江、卓袱台を拭きに戻る。

真知子　おばあちゃん達、父さんの部屋にいるって本当？
房江　ええそうよ。
真知子　いいの？
房江　何が？
真知子　……母さんがいいならいいけど。
房江　どうせ空いている部屋だし、一人より大勢の方が楽しいじゃない。

真知子　おばあちゃん達いつまでいるの？
房江　別に決めてないわ、いたいだけいてもいいって言ってあるし。
真知子　ずっといるのかな。
房江　そうじゃない。
真知子　そうじゃないって、新入りも来るって言っていたわよね。
房江　そうよ。
真知子　四人か……あんどんの会ってほんとうにそれだけ？
房江　それだけって。
真知子　宗教じゃないの？　あたし嫌よ。
房江　違うわよ。
真知子　だってうさんくさいじゃない。
房江　お年寄りが集まったボランティアよ。
真知子　家の中にそんなの入れないでよ。
房江　楽しいのよ。
真知子　あたしは楽しくない。
房江　まさか戻ってくるなんて思わないじゃない。
真知子　そのまさか。
房江　肩身が狭いわ。
真知子　気にしなけりゃいいのよ。
房江　この年で、まわりから笑われるのは堪えるものよ。

真知子　好きで分かれるわけじゃないわ。

房江　よく言うよ。……どれ、よく顔を見せてちょうだい。

真知子　何も変わらないわ（顔を背ける）

房江　……まあ、気が済むまでいたらいいよ。

真知子　ずっといる。今日から母さんと二人で、死ぬまでここで暮らす。（鞄と紙袋を持ち二階に上がる）

房江　真知子。……本当にもう。

房江、卓袱台の脇に座ったまま。

2

数日後。
茶の間には房江と一馬がいる。
房江の脇には、一馬が持ってきた手土産がある。

一馬　僕もね、行ってみてびっくりですよ。見ると聞くとでは大違い、あんなに辺ぴなところだとは思いませんでした。
房江　そうなの。
一馬　人が全然いないんですよ。
房江　期待外れなのかしら。
一馬　仕事で疲れた体を休めようと温泉に入ると、湯気の向こうにかすかな人影。なにげに世間話をしていたんですが、……よく見るとサルでした。
房江　……でもいいわね、知らない土地をあちこち回れて。
一馬　やだなぁお義母さん、あくまでも仕事ですよ。現地調査が目的ですから、観光する心の余裕なんかないですよ。
房江　将来嘱望されているんでしょう。
一馬　まあ、それなりには。でもね、ガツガツやらないと取り残されてあっという間に用なし、リストラですよ。

房江　大変ね。
一馬　所詮サラリーマンですから。
房江　りっぱよ。
一馬　……遅いですね。
房江　そうね。
一馬　本当にすぐ帰ってきますよね。
房江　用足しに行っているだけだもの、どこにも行きはしませんよ。
一馬　だといいんですけど、僕が来ることを察してどこか知らない遠いところに行ってしまったんじゃないかと思うと。
房江　大丈夫よ。
一馬　ショックですよ。出張から帰ってきたら電機は消えている。いつものようにもう寝ているかと思いきや、机の上に広げられた僕の判子を待つばかりの離婚届。会社では次期課長候補、出世頭とおだてられても、家に帰れば女房に逃げられた駄目亭主。情けないなぁ。
房江　そんな事ないわ。もう、遅いわね。

玄関より声がする。

郁雄　こんにちはー郁雄ちゃんでーす。
房江　あら、どうぞ。

郁雄　失礼しまーす。

郁雄、手土産片手に茶の間に入ってくる。

郁雄　いやあ、先日はありがとうございました。

房江　いいえ、こっちこそ何にもお手伝いできなくて。

郁雄　ばあちゃん喜んでいますよ。

房江　さ、座って。

郁雄　失礼しまーす。

郁雄、座る。

郁雄　あっ、これつまらないものですが。

郁雄、手土産を渡す。

房江　あら悪いわね、手ぶらでいいのに。

房江、受け取ろうとするが躊躇して。

房江　あら。

郁雄の手土産は一馬の手土産と同じもの。

一馬　あっ。

郁雄　おっ。

房江、慌ただしく受け取り、手土産を隠すように脇に寄せる。

房江　お茶入れるわね。

房江、お茶を入れる。

一馬　（よそよそしく）どうも。

郁雄　どうも。えーと。

房江　あらごめんなさい。こちら郁雄ちゃん、真知子の幼馴染で近所の酒屋の若旦那。で、こちら清水さん。真知子の旦那さん。

一馬　ああ、そうですか。どうもよろしく。

郁雄　ああ、噂の。

一馬　噂？

郁雄　元旦那さんでしょ。
一馬　やだなぁ元だなんて、現役ですよ。
郁雄　分かれてないの？
一馬　誰ですかそんな事言うやつは。
房江　分かれてないわよ。呆れたわね、誰なの郁雄ちゃん。
郁雄　あれ、聞き間違いかな？　聞き間違いですね、すみません。
房江　もう、そそっかしいんだから。
郁雄　すみません。
一馬　ハッハッハッ、いいんですよ勘違いなんて良くあることですからね。
房江　きっと真知子ね、もう。
一馬　いいんですよお義母さん。

房江、郁雄にお茶を出す。

房江　はいどうぞ。
郁雄　すみません。
房江　そうだ、買い物袋忘れちゃってごめんなさいね、びっくりしたでしょう。
郁雄　あれからうなぎ食べたんですか。
房江　分かった？
郁雄　あの匂い分かりますよ。

房江　年を取ると忘れっぽくてね。
郁雄　何言っています、まだまだじゃないですか。うなぎ食べて精つけてハッスルハッスル。
房江　落ち込んでいると思ったわ。
郁雄　この郁雄ちゃんが？　そんな事ないですよ、やだな。
房江　だいぶ落ち着いた？
郁雄　おかげさまで。
房江　いろいろ大変だったでしょう。
郁雄　いや、全部葬儀屋が仕切ってくれたので楽でしたよ。もっともお金は掛かりましたけど、店の酒飲ませて安くしてもらいました。ク～（泣くふり）
房江　おばあちゃん八十……
郁雄　四。
房江　大往生ね。しっかりしたお孫さんがいて悔いはないわよ。
郁雄　そんな。ああそうだ、おばあちゃん達にもご焼香してもらって、ありがとうございます。
房江　いえ。
郁雄　おばあちゃん達います？
房江　いるわよ。
郁雄　（柱の貼り紙を見て）あんどんの会か……ここに来てから長いんです

か？

房江　最近よ。

郁雄　そうですか。長い事ご無沙汰していたから分からなかったな。

房江　本当、昔みたいに遊びにいらっしゃいよ。

郁雄　喜んで。……ちょっといいですか？

房江　え？

郁雄　お礼を。

房江　あぁ、どうぞ。

郁雄、部屋へ行く。

一馬　あんどんの会か。ボランティアですか？

房江　まぁそんな所ね。

郁雄　おばあちゃん、郁雄ちゃんでーす、開けますよ。（ふすまを開ける）こんにちはーお元気ですかー、先日は家のばあちゃんのためにわざわざありがとうございました。お邪魔してもよろしいですか？

リュウコ　（声だけ）どうぞ。

郁雄　では。

郁雄、部屋に入る。

一馬　あいつ、元旦那なんて言いましたよ。幼馴染だからって、真知子の過去を知っているからって。

房江　あの子ったらもう。

一馬　いいんですよ真知子なら何を喋っても。

房江　まだ離婚と決まったわけじゃないのに。

一馬　みんな僕のことをバカにしているんだ。女房に逃げられた男とか甲斐性なしとか。

房江　そんな事ないわよ。

部屋から釘を打つ音がする。

房江　あら、何かしら。

一馬　みんなでからかって、僕が何か悪いことしました？　教えてくださいお義母さん。

房江　カズさんしっかりして頂戴。

一馬　真知子がいなくなってからすべてが上の空、風呂の栓抜いたまま水入れちゃうし、買ってきた刺身に醤油かけたらラップかかったままだし、朝ゴミ出したら町内会長から今日はゴミの日じゃないと怒られるし。真知子〜。

一馬、耐え切れず畳に伏せる。

房江　ちょっとカズさん。もう、困っちゃったわねぇ。

父の部屋の襖が開く。

一馬、何事もなかったように起き上がる。

郁雄　いえいえ、この間来ていただいたお礼ですよ。

マサミ　（声だけ）でもここまで。

郁雄　いいんですよ。何なら本当の息子だと思ってください。毎日お伺いしますよ。じゃあ、（ふすまを閉めかけて）間違いないですよね。（ふすまを閉める）

房江　……。

郁雄、一馬をじっと見ている。

一馬　何か。

郁雄　いえ。……可愛いおばあちゃん達ですね。

房江　郁雄ちゃんったら、もう仲良くなって。

郁雄　ボランティアですか。
房江　ええ。
郁雄　僕も入ろうかなあ。
一馬　随分お暇なんですね。
郁雄　店は女房に任せていますから。
房江　入れてくれないわよ。
房江　……まちちゃんは？
一馬　まちちゃん？　真知子ですか、今外に出ています。
郁雄　そうですか。
一馬　すぐ帰ってきますよ。遅いな真知子は。
房江　もう来るわよ。

郁雄、笑いを堪えている。

一馬　真知子はね、お義母さんに会いたくなって帰ってきただけなんですよ。戻ってきたらすぐマイスイートホームに帰ります。
郁雄　（ほくそ笑む）
一馬　（郁雄をにらむ）
郁雄　小学校の時机が隣でね、郁雄ちゃん勉強できないから見かねたまちちゃんがこっそり九九教えてくれた事があったなぁ。郁雄ちゃんお礼に店か

らこっそりピーナツの袋取ってきて、まちちゃんにあげたらとっても喜んでいたな。それがまちちゃんと郁雄ちゃんのなれそめですか～。

一馬　たとえ自分の店とは言え、盗んだものを与えて関係を作ろうとする。真知子の同情心を踏みにじる愚劣な行為ですね。

郁雄　思春期のためらいを覚える頃、傘を持たないまちちゃんにすっと差し出す郁雄ちゃん。二人は初めて肩を並べました。あ～恥ずかしい。

一馬　真知子に傘をやり、自分は濡れて帰るぐらいの事が、何故できないんですか。

一馬　まちちゃんの就職が決まって、ここで一緒にお祝いした時、未成年でありながら初めてかわす盃に、ほんのりと頬を赤く染めました。あ～禁断。

一馬　酔いがまわったせいでしょう。

一歩も譲らない二人。

郁雄　……あの、そろそろ（腰をあげる）

房江　何よもう行っちゃうの、一杯しか飲んでないわ。

郁雄　まだ回らなくちゃならない所があるもので。

房江　来たばかりなのに。

郁雄　いいんですよ又来ますから。それよりまちちゃんによろしくお伝えください。

房江　言っておくわ。
郁雄　必ずですよ。
房江　必ずね。
郁雄　じゃあ失礼します。

房江、郁雄を見送る。
郁雄、玄関より出て行く。

一馬　何だあの間男、許せないなぁ。

部屋から顔を覗かせるリュウコ。

リュウコ　マサミちゃん、行ったわよ。

老婆達、部屋から出てくる。
房江、戻ってくる。

マサミ　まさか来るとは思わなんだ。
リュウコ　いっそのこと本当の息子にしちゃえば。
マサミ　何を言う。

リュウコ　郁雄っていうのか。この間真知子さんの事、さかんに気に掛けておったぞ。
マサミ　ありゃホの字だね。
房江　幼馴染なのよ。
リュウコ　横恋慕かい。
一馬　（咳払いをする）
リュウコ　どなた？
房江　あー、ごめんなさい、清水さん。真知子の旦那さんよ。
マサミ　ああ、甲斐性なしか。
リュウコ　元旦那ね。
房江　ちょっとマサミちゃん、リュウコちゃん。
一馬　あなた達でしたか、ある事ない事べらべら喋っているのは。
リュウコ　ある事ある事。
一馬　元じゃなくて今の旦那です。
リュウコ　郁雄ちゃんって、なかなかいい男じゃないか。
房江　え、ええ。
リュウコ　いつもああやって来てくれるのかい。
房江　久しぶりよ。
リュウコ　随分ご執心だね。
マサミ　女は押しに弱いのよ。

リュウコ　ひょっとすると、ひょっとして。
一馬　おばあちゃん達やだなぁ。
房江　郁雄ちゃんに嘘ついたの。
リュウコ　うなぎを取りに来たって言ったら、まちちゃんは元気ですか？　まちちゃんは？　ってうるさいから、旦那と別れて戻ってきたよって言ったのさ。
マサミ　からかっただけ。
一馬　頼みますよ。
房江　ほどがあるわ。
リュウコ　ほどほどに。
房江　おばあちゃん達も座ったら。一緒にお茶を飲みましょう。
ヤヨイ　そうしよう。

老婆達、座る。
房江、お茶を入れる。
玄関より真知子が帰ってくる。

真知子　ただいま。お客さん？
リュウコ　噂をすれば。

真知子、茶の間に入り一馬を見つける。

真知子　まずい。
房江　お帰り。
一馬　よう。
真知子　何たる失態。あんな靴いつ買ったのよ、分からなかったわ。
一馬　出張先ではきつぶしちゃってさ、新しいのを買いました。
真知子　随分派手じゃない。
一馬　サイズがなくてな、あのくらいだったらＯＫだろ。
真知子　どうぞご勝手に。
一馬　そうそう、（ポケットより箱を取り出す）わが姫君よ、いつまでも美しくあらんことを願う。（箱からブローチを取り出す）どう、綺麗だろう。
真知子　いらないわよ。
一馬　何言ってるの、欲しがっていただろう。
真知子　気が変わったの。
一馬　青いワンピース持っていただろう。似合うと思うんだけどなぁ。
真知子　結構です。
マサミ　いらないんだったらあたしに頂戴。
一馬　だめですよ。
マサミ　あげる人がいなくなったプレゼントは哀しいなぁ。

ヤヨイ　（ブローチになったつもりで）キラキラ、キラキラ、ずっとショーウインドウの中にいたんだけど、やっとあたしを買ってくれる人が現れたのよ。嬉しい、きっとプレゼントね。一度真っ暗いお部屋に閉じ込められちゃうんだけど、パッカって蓋が開くと目の前には素敵な笑顔がまっているの。あたし、その笑顔を見るととっても嬉しくなっちゃって、ますます輝いちゃうわ。キラキラ、キラキラ、キラキラ、キラキラ、キラキラ……

マサミ　ヤヨイちゃん。

一馬　欲しくなったら言ってくれ。

真知子　永遠にないでしょう。それよりちゃんと判子押してくれた？

一馬　押すわけないだろう。

房江　郁雄ちゃん来ていたのよ、お前によろしくって。

真知子　知らないわよ。

房江　幼馴染みじゃない。

マサミ　吊り棚直してくれたんだよ。

真知子　どうせすぐ壊れるわ。

マサミ　そんな。

真知子　用もないくせに、昔っからよ。

房江　この間のお礼に来てくれたんだよ。

真知子　こじつけよ、しつこいのは嫌い。

一馬　あいつの事嫌いだろ、な、嫌いだろう。

真知子　あなたの事も嫌いです。
一馬　俺が悪かった。
真知子　あらあらあら。
一馬　もう一度やり直そう。
真知子　一人でやり直せば。
一馬　話し合えば分かる。
真知子　時すでに遅し。
一馬　頼む、戻ってきてくれ。（土下座する）

一馬の携帯が鳴る。
暫く鳴っているがとる。

一馬　……ちょっとすまん。はい清水。（聞こえないように玄関に行く）
房江　ちゃんと話し合ったほうがいいって。
真知子　話す時間も取れない人とどうやって話すのよ。
マサミ　そりゃそうだ。
真知子　（マサミを睨む）あたしの話はおしまいです。
房江　真知子。
真知子　あら皆様、アンポンタンの会議ですか。
リュウコ　会議？

真知子　（縁側に座る）本日の議題は、期待の新入りさんが来なかったので、会の運営方針を方向修正しているわけですね。

リュウコ　会の方針は変わりません。

真知子　待ち人来ぬか。されど待つ身のはかなさよ。

ヤヨイ　来るわよ。

マサミ　道に迷っているのよ。

真知子　……いい天気ね。こういう日はくよくよ考えないほうがいいわ。

リュウコ　くよくよ？

真知子　スッパッと諦めてこの家も出て行く。すべてが丸くおさまるじゃない。

房江　なんてことを言うの。

一馬、茶の間に戻ってくる。

一馬　真知子、すまん行かなけりゃならない。

真知子　どうぞご勝手に。

一馬　ビーフシチュー食べたいな。

真知子　自分で作ったら。

一馬　そうだ、今度一緒に旅行行こう。山奥にいい温泉見つけたんだよ。

ヤヨイ　あたし行きたい。

一馬　誰もいない中、二人っきりで湯船に入ってさ。

リュウコ　いいわね。
マサミ　あぁ～幸せ。
一馬　（老婆達に）邪魔しないでください。
真知子　先約があるみたいなので遠慮しておくわ。
一馬　はぁ。お義母さん又来ます。
房江　せっかく来てくれたのにねぇ。
一馬　じゃあな真知子。（未練がましく出て行く）そうだ、ゴミの日って何曜日だ？
真知子　月水金は燃えるゴミ、木曜が燃えない日です。
一馬　えぇーと、（メモを取る）よしっと。また来るからな。
真知子　あっ。
一馬　なんだ、どうした。
真知子　前の晩に出すと町内会がうるさいから気をつけて。
一馬　（残念そうに）分かった。（メモを取る）ん？
真知子　早く行きなさいよ。

一馬の携帯又鳴り、慌てて玄関より出て行く。

真知子　あたしはやり直すってきめたの、だから戻ってきたのよ。
房江　やり直すんだったらカズさんとでしょう。

真知子　もう夢見る少女とは違います。
房江　あの頃はそんな憎まれ口たたかなかったよ。
真知子　そちらもやり直したほうがいいんじゃないですか。来ないものは来ない。
　諦めが肝心よ。
リュウコ　来るわよ。
真知子　はぁーいい天気。

　真知子、砂場の方に行く。

マサミ　すっぽかされたかね。
リュウコ　期待したんだけどね。
ヤヨイ　若い男。
マサミ　まだ言っている。
ヤヨイ　だって。
リュウコ　諦めきれないな。
マサミ　期待した分落ち込むなぁ。
ヤヨイ　どうする？
リュウコ　待つ？
マサミ　いつまでさ。
リュウコ　来るまで。

ヤヨイ　あんまりじらさないでよ。
マサミ　色男の手かね。
リュウコ　そんな事しなくても。

真知子、しゃがみ込み、砂を手に取り零れ落ちるさまを見ている。
真知子、何度か砂を手に取っていたが、砂場の中に何かあることに気づく。

真知子　あら。（砂をかき分ける）

真知子、突然叫び声をあげ縁側まで駆け戻る。

房江　どうしたの？
真知子　誰かいる。

一同、砂場の方を見つめる。

3

次の日。
老婆達が卓袱台であんどんを作っている。
その中に郁雄も混じって作っている。

郁雄　中々難しいですね、見た目は簡単なんですけど。こう見えても細かい作業は得意なんですよ。しかしこれは手強いな。

リュウコ　あたしたちでやるからいいよ。

郁雄　こうかな？

マサミ　本当にいいって。

郁雄　任せてくださいよ。期待外れの新入りとは違いますからね。何やらせても不器用で壊してばっかり、材料の無駄、それにすぐいじける。所詮掃除要員。その点、この郁雄ちゃんは違いますよ。何せ気合が違いますからね、気合が。オリャー！

ヤヨイ　うわっ、唾飛んだ。

郁雄　気合の唾です。オリャー！

ヤヨイ　静かにしてよ。

郁雄　こりゃ失敬。何事にも気合を入れないと物事に取りかかれない質なもの

で。フンフン（鼻息が荒い）

ヤヨイ　癇に障る。

リュウコ　郁雄ちゃんその気持ちだけで。

マサミ　もういいわ。

郁雄　気持ちだけではだめです、行動が伴わないと。

ヤヨイ　もっと普通にしてよ。

郁雄　心外だなぁ、僕の普通は他人には理解されぬのか。今日も終わろうとしている、明日の風が吹く頃には、郁雄ちゃんの普通も理解されぬまま過ぎ去ってしまうのでしょうか。

誰も反応しない。

郁雄　やだなぁ、反応してくださいよ。郁雄ちゃんちょっとつらーい。

それでも誰も反応しないので郁雄、黙って作業を続ける。

房江がタマと一緒に掃除用具片手に勝手口から入ってくる。

房江　いやぁ、くたびれたよ。

リュウコ　終わったの？

房江　あぁ、終わった。タマも少し休もう。

タマ　はい。

房江とタマ、縁側に座る。

マサミ　ごくろうさま。
房江　いいえ。
リュウコ　ひどい事する人がいるものだねぇ。
マサミ　どうせやるんだったら、自分の家の壁に書けっていうの。
ヤヨイ　初めてなの？
房江　こんなこと一度だってなかったよ。
郁雄　又書かれるかもしれませんね。おばさん、もしなんでしたらこの郁雄が寝ずの番しましょうか。きっと犯人を捕まえてみせますよ。（あたかも捕まえたのごとく）コラ、どうだ、参ったか。コノヤロ、コノヤロ
ヤヨイ　癇にさわる。
房江　大丈夫よ、只のいたずらだろうし。
郁雄　（立ち上がり庭に降りながら）家の周りに心配事があると、まちちゃんの風邪も良くなりません。（庭から二階の真知子の部屋に向かい）まちちゃーん、早く良くなってくださーい、郁雄がついてますよー。

二階の窓ガラスにヒビが入る。

房江　あら、ヒビが入った。
リュウコ　嘘。
マサミ　本当。
ヤヨイ　聞こえた。
郁雄　なんと、まちちゃんが僕に会いたい一心で。その気持ち伝わりました。二人の間を阻むものなど何もありません。まちちゃーん。
房江　郁雄ちゃん、分かったわよ。真知子にはちゃんと届いていますって。せっかく寝ているのに起こしちゃ良くないよ。
郁雄　そうですね、お義母さん。
マサミ　お義母さん？
郁雄　今、ふとそう呼びたくなりました。（房江の手を取り）老後の心配はいりません。まちちゃん共々僕が面倒見ます。
房江　ちょっ、ちょっと。

居間の電話が鳴る。

房江　あぁと、電話、電話。

房江、郁雄の手を振り払い受話器を取る。

房江　はいもしもし中道です。あら、こんにちは。……いいえ帰って助かっているわ。……あらそう、ちょっと待っててね今替わるから。郁雄ちゃん電話。

郁雄　俺？

房江　愛ちゃん。お店忙しそうよ。

郁雄　いないって言って。

房江　だめよ、もういるって言ったんだから。

郁雄、電話に出る。

郁雄　もしもし、あっ、え、あっそう。駄目だよ、おばあちゃん死にそうでさ、俺の名前を呼ぶのよ。郁雄さんそばに居て頂戴、行かないで郁雄さん。（一瞬耳から受話器を遠ざける）あっ、もしもし、もしもし。切っちゃった。

房江　戻って来いって？

郁雄　いいのいいの、店は女房に任せて、酒屋の若旦那は道楽三昧。

リュウコ　道楽？

郁雄　やだなぁ、あんどんは別ですよ。ここにずっといるんでしょう、何なら入ろうかなぁ。入りたいなぁ。（タマを見て）使えない新入りより郁雄

ちゃんの方がいいと思うけどなー。

リュウコ　誰が死にそうだって？

郁雄　もう、いじわるだなぁ。さてと、緊急事態発生。郁雄ちゃんは戻ります。（庭に降り立ち）じゃあまた来ます。タマちゃん、じゃあね。

タマ　じゃあ。

リュウコ　お手伝いありがとうね。

郁雄　いいえ。（二階に向かい）しばしの別れです、さらば。

郁雄、勝手口から帰る。

ヤヨイ　やっと行ったわ。

房江　悪い人じゃないのよ。

ヤヨイ　悪気がない分始末が悪い。

リュウコ　ああいうキャラクターなんだからいいじゃない。

ヤヨイ　邪魔しに来ているだけじゃない。

マサミ　確かに。

ヤヨイ　タマのほうがいいわ。

リュウコ　タマねぇ……。

老婆達、タマを見る。

タマは縁側に座ったまま。

ヤヨイ　初めはうまくいかないものよ。

リュウコ　そりゃそうよ、簡単に作れてたまるものですか。

タマ　がんばります。

自身無げなタマに不安な人達。

二階から真知子が降りてくる。

真知子　（辺りをうかがうように）帰った？

房江　帰ったわよ。

真知子　急に来るんだもの、びっくりした。

房江　毎日来ているわよ。

真知子　執念ね。

房江　お義母さんって呼ばれて、手まで握られちゃった。

真知子　どういうつもりなんだろう。

リュウコ　ああいうつもりだろう。

真知子　落書き落ちた？

房江　きれいに落としましたよ。

タマ　はい。

真知子　でも、「クモのバカ」ってなんだろう。
房江　クモが嫌いな人がかいたんじゃないの。
リュウコ　天井からツツーっと糸が垂れてきて。
ヤヨイ　やだぁ。
リュウコ　夜な夜なクモが布団の周りを。
マサミ　気色悪い。
真知子　家に書くなよ。

タマ、立ち上がり手を払っている。

房江　大丈夫よ。
ヤヨイ　タマ、出来たやつ部屋まで運んでくれる。
タマ　あっ、はい。

タマ、茶の間に上がりあんどんを抱えて部屋まで運ぶ。
危なっかしそうに見ている真知子。

リュウコ　気をつけてね。

タマ、部屋の前まで来て立ち止まる。

タマ　すみませ〜ん。
マサミ　何？
タマ　開けて貰えますか。（両手は塞がっている）
マサミ　……（がっかりしながら立ち上がる）
リュウコ　いいよマサミちゃん、あたし行く。
マサミ　ごめん、お願い。
リュウコ　やれやれ。

リュウコ、立ち上がり部屋のふすまを開けてやる。

真知子　世話が焼けるわね。

タマが中に入ると激しい音がする。

マサミ　どうしたの？
リュウコ　聞かないほうがいいと思う。
マサミ　聞かない。
房江　ああ、お茶にしましょう。お湯を沸かしてくるわ。

房江、台所に行く。
三人の老婆、部屋を片付けに行く。
真知子、縁側に座る。
部屋から再び激しい物音。

真知子　大丈夫かしら。

タマ、部屋から出てくる。

真知子　どうしたの？
タマ　お茶でも飲んでいろと言われました。
真知子　座ったら。

ヤヨイ、部屋から出てくる。

ヤヨイ　タマ、おまんじゅう買ってきて頂戴。昨日一緒に行ったから道分かるわね。
タマ　はい。

ヤヨイ、財布の中からお金を取り出しタマに渡す。

ヤヨイ　迷子になっちゃ駄目よ。
タマ　大丈夫です。
真知子　すぐそこでしょう。

タマ、勝手口より出て行く。
リュウコとマサミ部屋から出てくる。

マサミ　お茶にしましょう。
リュウコ　喉が渇いたよ。
房江　（台所から）今お湯を沸かしているから待っていて頂戴。

老婆達は卓袱台の上を片付ける。

真知子　お荷物が増えて大変ですね。
ヤヨイ　お荷物じゃないわ。
真知子　新入りとは名ばかりの使いっパシリですか。
ヤヨイ　そんな言い方しないでよ。
真知子　入るのに反対したくせに。
ヤヨイ　そりゃそうだけど、見ているとなんか。

リュウコ　こんな時もあるさ。
マサミ　当てがはずれたねぇ。
ヤヨイ　タマは大丈夫だって。
真知子　どこが。
ヤヨイ　不器用なだけよ。
真知子　砂の中で寝ていたのよ、いかれているわ。
ヤヨイ　誰もいなかったから休んでいただけじゃない。
真知子　いくら気持ちが良かったからって信じられない。あの時入れるべきじゃなかったのよ。
マサミ　ちゃんと多数決で決めたじゃない。二対二の棄権一。後は本人次第。
真知子　その結果がこれよ。
リュウコ　後悔している？
マサミ　後悔しても始まらないでしょ。
真知子　あの時反対しておくんだった、って顔ですよ。
マサミ　まぁ、少々期待外れな事は確かだけど、これからだよ。
真知子　たかがあんどんくらいで、そんなに期待する程の事じゃないと思うけどなぁ。
リュウコ　たかがあんどんねぇ。
真知子　別に新入りなんか入れなくたって、おばあちゃん達だけで作っていればいいんじゃないの。

リュウコ　あたしらだけでというわけにも。
真知子　後継者ですか。匠の技を伝えるのも、涙ぐましいものがあるんですね。
ヤヨイ　そうよ、あんたなんかに分かるものですか。
マサミ　ヤヨイちゃん。
真知子　おお、こわ。だれも望まぬあんどん作りにそこまで思いがあるとは、頭が下がりますね。
ヤヨイ　バカにしないでよ。
マサミ　ヤヨイちゃんったら。
リュウコ　ごめんね、真知子ちゃん。
真知子　いいんですよ、どうせ図星なんでしょうから。まっ、作るだけ作って早くこの中道家から出て行かれる事をあたしは望みます。
ヤヨイ　言われなくてもそうするわよ。
真知子　足手まといの新入りの面倒をよく見てやって下さい。
ヤヨイ　ふん。

玄関より声がする。

由紀　ごめんくださーい。
房江　はーい。

房江、台所から玄関に行く。

リュウコ　真知子ちゃん、あたしらの事良く思ってないのはわかるけど、同じ屋根の下にいるわけだから、何とかうまくやって行きましょうよ。

真知子　無理です。

リュウコ　そんなに断言しなくても、急にとは言わん徐々にでいいから。

真知子　無理なものは無理、あたしが合わせる必要なんてないんです。そちらが出て行きさえすれば丸くおさまります。

リュウコ　そこをほれ、何とかうまく。

真知子　そこをほれ、のほれって何ですか？　ていのいい妥協ですか。

ヤヨイ　リュウコちゃん、こんなわからずやに話しても無駄よ。

真知子　居候に言われる筋合いはありません。

ヤヨイ　あんたなんか死んじゃわないと分からないのよ。

真知子　何よそれ、バカって事。ちょっと言い過ぎじゃない？

房江、手にケーキの箱を持ち、由紀を連れて茶の間に入ってくる。

房江　何を騒いでいるんだい、真知子。

真知子　このアンポンタンが悪いのよ。

房江　お客さんが来てるってのになんだねこの子は。人のせいにばかりして。

真知子　あたし我慢ができない。

房江　じゃぁお前が出て行ったらいいだろう。戻るところがあるんだから。

リュウコ　まあ、あんまり怒りなさんな。ほれ、やかんが鳴っているよ。

台所のやかんが鳴っている。

房江　あらやだ。

房江、ケーキの箱を卓袱台に置き台所に行く。

由紀、立ったまま様子を伺っている。

リュウコ　あぁ、空いている所へどうぞ。

由紀　よろしいですか？　じゃぁ失礼します。

マサミ　どうぞ。

マサミ、座布団をすすめる。

由紀　すみません。

由紀、はじの方へ座る。

由紀　初めまして、由紀と申します。
真知子　こんにちは。
由紀　やだわ、そんなに固くならないでください。真知子さんでしょう。
真知子　ええ。
由紀　えーと、こちらがリュウコさん、そちらがマサミさん、で、ヤヨイさんですよね。
真知子　どこかでお会いしていましたっけ。
由紀　お噂はかねがね伺っております。
リュウコ　オウワサ。
マサミ　まずいことした？
ヤヨイ　ドキッ。
真知子　誰から？
由紀　可愛い妹さんと、おばあちゃん達が仲良くやっているって伺っています。
真知子　兄さん？
由紀　はい。正男さんとは親しくさせていただいております。
リュウコ　何だ正男さんかびっくりした。
マサミ　仲良くねぇ。
ヤヨイ　可愛い？
真知子　意外な展開、兄さん女友達いたんだ。

由紀　知り合って一年になります。
真知子　ふーん。兄さん今日はいないわよ。
由紀　ええ、近くまで来たものですから寄ってみようと思いまして。もしかしたらいるかなぁなんて。
マサミ　アパートの方にいるんじゃないの？
由紀　……。

房江、ポットを持って茶の間にやってくる。

房江　由紀さんからケーキを頂いたのよ、真知子お皿用意して頂戴。
真知子　えっ、ケーキ。
房江　あぁ、まだ紹介してなかったわね。
真知子　聞いたわ、兄さんの友達でしょう。
マサミ　隅に置けないねぇ。
房江　おやまあ。
由紀　お口に合うかどうか、みなさん召しあがって下さい。
房江　あら、紅茶のほうがいいかしら。
真知子　そうね。
リュウコ　せっかくだから紅茶にしましょう。
ヤヨイ　賛成。

房江と真知子、紅茶を入れケーキを取り分ける。

真知子　あっ、イチゴのショートケーキだ。

ヤヨイ　あたしそれいい。

真知子　（ヤヨイを一瞥）

房江　由紀さんすみませんね。

由紀　本当だったら正男さんと一緒にお邪魔するべきなんですけど、正男さんの話すみなさんの事を聞いていると、他人のような気がしなかったもので、つい来ちゃいました。

房江　遠慮しなくていいんですよ、正男はそういう所不精だから。

真知子　女心が分からないのよ。

ヤヨイ　いただきまーす。

由紀　どうぞ。

それぞれケーキを食べ紅茶を飲む。

真知子　おいしい。

ヤヨイ　シアワセ。

房江　たまにケーキもいいわね。

由紀　正男さんのお宅落ち着きますね。
真知子　古いだけよ。
房江　正男の父さんがね、あっちこっち手を入れたおかげで何とか建っているようなものよ。
真知子　下手の横好き。
房江　台所の床、吊り戸棚、縁側も作り直して、ひさしもそうだ。
由紀　凄いですね。
房江　家の周りの板塀もよ。
真知子　あれは郁雄が覗くからよ。
房江　そうだったの？
真知子　あの時は言えなかったけどさ。
由紀　いいお父さんなんですね。
房江　そこに砂場があるでしょう。
由紀　ええ。
房江　あれもよ。
由紀　本当ですか？
房江　この近くに公園がないものだから、砂遊びもできなくてね。
真知子　それで作ってくれたのよ。
房江　せがんだことなんか覚えてないんじゃないかしら。
由紀　正男さんの小さい頃かぁ。

房江　今じゃ少なくなったけど砂が山盛りよ。
由紀　山盛りですか。
房江　加減ってものを知らないのよ。
由紀　何でもできる凄いお父様なんですね。
房江　正男が十九だったかしら、亡くなったのは。
由紀　そうなんですか？
真知子　聞いてなかった？
由紀　ええ。
房江　お酒の飲み過ぎが原因よ。
由紀　……。
ヤヨイ　ごちそうさま。あーおいしかった。
リュウコ　もう食べたの。
ヤヨイ　だって好きなんだもん。
房江　ヤヨイちゃん、紅茶のおかわりは？
ヤヨイ　ちょうだい。
由紀　そういえば、もう一方おられると伺ったのですが。
マサミ　あっ、タマ。
ヤヨイ　おまんじゅう買いに行っているわ。
リュウコ　じゃぁすぐ来るわね。
ヤヨイ　ケーキの次はおまんじゅうか。

マサミ　なんだいヤヨイちゃん、まだ食べるの。
ヤヨイ　甘いものはいくらでも入るわ。
房江　次は緑茶にする？
ヤヨイ　あー、贅沢。
真知子　兄さんとはどこで知り合ったの？
由紀　仕事の関係で。
真知子　じゃぁ由紀さんも出版関係？
由紀　今は辞めました。
真知子　ねぇ、兄さんの仕事ってどう？
由紀　真面目ですよ。期日はちゃんと守るし、まわりからの信頼も厚いです。
真知子　そうなんだ。家では不愛想だから外では嫌われているかなって思ったんだけど、やる時はやるのね。……ねぇ、兄さんのどこが気に入ったの？
房江　真知子ったら。
由紀　いいんですよ。
真知子　聞かせてよ。
由紀　そうねぇ、真っ白な心の持ち主で、一緒にいると安心できるところかな。
真知子　全然違う。それ本当ですか？　騙されていますよ。
由紀　正男さんはそういう人ですよ。
房江　真知子ったら。
真知子　アンポンタンはどう思う？　今の発言。

リュウコ　う、うん。
マサミ　近からず遠からず。
ヤヨイ　そうねぇ。
由紀　正男さんはそういう人なんです。

由紀、空をながめる。
腑に落ちぬまま紅茶を飲む真知子。

4

数時間後の夜。
勝手口より正男が入ってくる。
所在なげに庭を歩く。
しばらくして真知子、二階の窓を開け正男を見つけ見ている。
正男、見られていることに気付く。

正男　まだ起きていたのか。
真知子　うん。疲れているんだけどなんかね。
正男　母さんは？
真知子　もうとっくに寝ている。
正男　そうか。この間は悪かったな。
真知子　もう忘れた。……タマっているでしょう。
正男　噂の新入り？
真知子　大変だったのよ、おまんじゅう買いに行ったっきり帰ってこなくてさ。
正男　三日も経たないうちに逃亡か、根性ねえな。
真知子　きっと迷子になったから探しに行こうって、アンポンタンが諦めなくてさ。

正男　迷子？　おまんじゅう屋ってすぐそこだろう？　どうやったら迷子になるんだよ。逃げたやつを追いかけても戻ってこないのにな。

真知子　そのうち母さんも探しに行こうなんて言い出しちゃって。

正男　おせっかいの母さんらしいな。ほっとけばいいのに。

真知子　まさか母さん一人で探させるわけにいかないじゃない。

正男　もしかして探しに行ったのか？

真知子　そのまさか。何であたしが気まぐれ新入りを心配しなきゃならないのか不思議だわ。

正男　とばっちりだな、同情したってなんにもならないのに。他人と付き合うからそうなるんだ。

真知子　なによ他人事みたいに。

正男　他人事だろ。

真知子　あたし見つけたわよ。

正男　見つけた？

真知子　そういう時行きそうな所って、この辺りじゃあそこしかないじゃない。海岸公園を探したら思った通り、ぼーっとしながら真っ黒な海を眺めていたわ。

正男　すごいな、探偵にでもなれよ。

真知子　連れて帰ってきたらもうくたくた。

正男　ご苦労なこった。

真知子　あいつらには振り回されっぱなし、もうこりごりだわ。
正男　だろうな。……なぁ、似てないか？
真知子　……父さん？
正男　厄介者で、逃げてばかりで。
真知子　……上がったら。
正男　いや、ここがいい。
真知子　変なの。
正男　……由紀が来たんだってな。
真知子　隠すことないのに、ちゃんと紹介してよ。
正男　そんなんじゃないよ。
真知子　付き合っているんでしょ？
正男　そう見えたか。
真知子　うん。
正男　そうか。
真知子　結婚しないの？
正男　よせよ。
真知子　兄さんを探しているみたいだった。
正男　図々しいおんなだよな。
真知子　ちゃんと会っているの？
正男　……どう思った？

真知子　え？　由紀さんの事？
正男　あぁ。
真知子　いい人ね、ケーキ頂いちゃった。
正男　なにかっていうとケーキだ。
真知子　おいしかった。
正男　あいつ、ヒステリーなんだ。
真知子　そうは見えなかったよ、落ち着いていて上品な感じがした。
正男　（笑いながら）由紀が上品か。
真知子　女はみんなヒステリーよ。
正男　そうか。
真知子　何か言ってた？
正男　可愛い妹さんとおばあちゃん達が仲良くって羨ましかったとさ。
真知子　嘘ばっかり。
正男　本当にそう言ってたぜ。
真知子　それだけ？
正男　……あぁ。
真知子　ねぇ、泣かしたら駄目よ。
正男　泣くような女じゃないって。
真知子　……変なの。待っているんじゃないの。
正男　関係ない。

真知子　……郁雄がね、吊り棚直してくれたんだって。
正男　郁雄が？
真知子　マサミちゃん喜んでいたそうよ。
正男　すぐ落ちそうだな。
真知子　本当。
正男　あのばあさんの写真見たか？
真知子　マサミちゃんの写真？　ううん。
正男　お互い好きだったのに一緒になれなかったんだってさ。
真知子　良く知っているわねそんな事。
正男　聞かされたんだよ、興味がないからうんうん頷いてたら直すはめになってさ。
真知子　しょうがないわね。……今度どんなにいい男か見てみるわ。
正男　たいした顔してないぜ。
真知子　男は顔じゃないわ。
正男　よく言うよ。
真知子　飾ったって事は長くいるって事よね。
正男　いつまでいるつもりなんだろうな。
真知子　正直早く出て行ってほしいのよね。
正男　お前が戻れよ、話が早い。
真知子　嫌だ。

正男　勝手だなぁ。
真知子　だってあたしの家だもん。
正男　お前はもうここの家の人間じゃないんだぞ。
真知子　いつでも戻って来いって泣いていたのは誰よ。
正男　よく覚えているな、あれはその場の雰囲気。
真知子　（泣く真似をして）まちこぉ～。
正男　おい。
真知子　いつでも戻ってこ～い。
正男　やめろって。
真知子　戻ってきたんだから嬉しがってよ。
正男　カズさん一人で寂しがっているよ。
真知子　仕事人間にそんなこと言う資格はない。
正男　分かってやれよ。
真知子　いいの、すれ違いの仮面夫婦だから。あたしはそれが嫌になっただけ。
正男　決め込むなよ。
真知子　ここにいれば十分幸せ。アンポンタンがいなければもっと幸せなんだけどね。
正男　ここにいたって、幸せになんかなれないって。
真知子　どうしてよ。
正男　カズさんと一緒に乗り越えろよ。

真知子　……。
正男　正直真知子が羨ましかったよ、この家を出られた真知子が。
真知子　兄さんだって出たと同じじゃない。
正男　逆さ。必ず帰ってこなければならない、どこにも行くことができない。
真知子　母さんの事を心配しているの？
正男　いや。
真知子　あたしが戻ってきたんだから心配しなくても。
正男　そうじゃない。
真知子　父さんの事？
正男　真知子は好きだったのか？
真知子　……。
正男　……（砂場を見て）見ろよ。
真知子　え？
正男　あんなにたくさんあったのにな。
真知子　山のようだったのにね。
正男　今でもはっきり覚えているよ。この砂場を作ったとき、トラックで何台も運んできたっけ。近寄る俺を、危ないから遠くで見てろって怒鳴ってた。俺はそこの縁側に座りながら、夏の日ざしの中流れる汗を拭おうともせず、ただひたすらスコップで砂をかき上げていた姿を眺めていた。次から次へと山のように積み上げられた砂は、俺たちの遊び場というよ

り、行き場のない魂のカタマリのようだった。

真知子　覚えているわ、とても暑かった。

正男　昼間から飲んだくれて家の中をめちゃくちゃにして、勝手に死んで、残したものがこれだ。

真知子　もう昔の事ね。

正男　真知子は憎んでないのか？

真知子　憎む必要なんかないわ。

正男　……女だからな。

真知子　関係ない。

正男　貧乏より家にいられる事が恥ずかしくてな。友達に遊びに行ってもいいか聞かれたら答えられなくて、突然殴ったりした。

真知子　……。

正男　寝ている俺の布団を剝がして、そんな事しちゃいかん、そんな事しちゃいかんって酒臭い息で言い続けていた。

真知子　あたし知らんぷりしてたね。

正男　きっとあそこにいるからって母さんに言われて、海岸公園まで迎えに行ったことがあった。ブランコに乗りながら弛んだ口元から涎を垂らし、海の上にぽつんと浮かぶ貨物船を眺めていたよ。声をかけたら正男が来た、正男が来たって、キチガイじみた大きな声でわめき散らしてそこら中走り回っていた。

真知子　……。

正男　風呂上がりに鼻歌まじりの浪花節で俺の横を通った時、うなり声とともに、畳の上にまき散らされた濁った血の中に倒れた黒い体はピクリとも動かず、ただ、すがりつくように澱んだ眼が、俺の方をじーっとみていた。……その時俺は、やられたと思った。

真知子　どうしてそんな風に考えるのよ。

正男　何度もそう思ったさ。もういい、もういいんだって。

真知子　だったら。

正男　俺の中の最も嫌いな他人なんだ。

真知子　そんな言い方しないで。

正男　他に言いようがない。

真知子　考え過ぎよ。

正男　その事ばかり考えている。

真知子　そう。……そばにいたけど何も話さなかったし、何も分からなかった。死んだ時はそんなものかと思ったけど、もっと分かってあげてもよかったかな。

正男　あんなにたくさんあった砂がもうこれだけだ。

真知子　風が吹いて飛ばされて、雨が降って流されて、気が付かないうちにどんどんなくなっていくのね。

正男　そのうちこの砂場の砂、みんななくなってしまうんだろうな。

庭に立ち尽くす正男と二階の窓の真知子はお互い無言でいる。

5

数日後。
雨が降っている。
老婆達とタマが縁側に座り、ぼんやりと外を眺めている。
房江、茶の間で一緒になってぼんやりしている。
二階から、真知子と一馬が降りてくる。

真知子　やだなぁ、母さんまで一緒になってぼんやりして。
房江　あぁ、ついつられちゃって。なんとなくなっちゃうのよねぇ
真知子　雨の日はあんどんの会も開店休業か。
房江　今から戻るのかい。
真知子　交渉決裂。残念ながら戻りません。
一馬　持久戦です。
房江　そう。
真知子　無駄なのに。
房江　仕事は大丈夫なの？
一馬　たまりにたまった有休使わせてもらっています。
真知子　そんなことしていいの？

一馬　微妙な立場。
房江　何もそこまでしなくたって。
一馬　（縁側を見て）あれは何しているんです？
房江　ただ、ぼーっとしてるの。
一馬　何かの訓練ですか？
房江　雨が降ると、紙や木がしけっちゃって作れないんですって。
一馬　一人増えていますね。
房江　あぁ、タマね。
一馬　タマ？
真知子　別名使えない新入り。
房江　性格悪くなったねぇ。
真知子　現実に気付いたの。
一馬　ぼーっとするかぁ僕にはできない、時は金なりですよ。まっ、元より人種が違いますか。
真知子　カズもやってみたら。
一馬　ぼんやり……非経済行為か、願わくはああやって生きていきたい。
真知子　皮肉。
一馬　悟りだな。あんどんの会か……ただの老人クラブかと思いきや恐るべし。
真知子　ちょっと。
一馬　全身全霊かけてあんどんとともに過ごしている。作らないこともこれま

た作ること。修行者だな、拝ませてもらおう。ありがたや、ありがたや。

房江　真知子、お前が戻らないからカズさんがおかしくなっちゃたよ。

真知子　やめてよ。

一馬　ここは一つあやかろう。真知子が戻ってきますように、真知子が戻ってきますように。

真知子　早く別れられますように、別れられますように。

真知子、一緒になって拝む。

房江　ちょ、ちょっと。

房江、訳も分からずつられて拝む。

二階から正男が降りてくる。

正男　おいおい、何やってんの。

三人、正気に返る。

一馬　ああこれはお義兄さん。どうもしばらくです。

正男　しばらくじゃないよ、カズさん頼むよ。

一馬　つい。
正男　つい、で宗教始められたんじゃたまったもんじゃないよ。
真知子　そうよね。
正男　真知子もだろう。
真知子　つい。
正男　あんどん教でも始めるの？　（ちらりと母を一瞥）
房江　カズさんの方が修行者みたいだよ。
一馬　僕が？
房江　我がまま娘に振り回されても耐えている。いくら育て方が悪かったとはいえ頭が下がるわ。
真知子　我がままで悪うございました。
正男　で、連れて帰るの？
一馬　の、はずなんですが。
正男　違うの？
一馬　なかなか手強いです。
正男　だめかぁ。

老婆達、立ち上がり部屋へ戻ろうとする。

房江　今日はおしまい？

リュウコ　部屋でぼんやりする。
房江　そう。

老婆達、部屋へ戻る。
タマ、縁側に座ったままでいる。

房江　タマは行かないの。
タマ　もうちょっとここにいます。
正男　新入りなんだから先輩たちと行動一緒にしろよ。それにあんどんの一つくらいちゃんと作れよ。そのために入ったんだろう。
タマ　はぁ。
正男　はっきりしないやつだな。
タマ　愛とは何か。
正男　は？
タマ　ずっと考えているんです。
正男　はぁ？
一馬　深いなぁ。
ヤヨイ　何も考えていないくせに、早くいらっしゃい。
タマ　分かりました？
ヤヨイ　当たり前でしょう。

タマ、部屋へ行く。

一馬　ますます深いなぁ。

真知子　どこが。

正男　この間言っていた悪戯、あれからどう？

房江　あれっきりよ。

正男　じゃあよかった。

房江　何回もされたんじゃたまったもんじゃないわ。

正男　クモって書いてあったんだって？

房江　クモのバカ。

正男　クモのバカ？

房江　変な事書く人がいるもんだよ。正男分かる？

正男　さぁ、クモのバカねぇ。

一馬　落書きされたんですが。

房江　そうなの。

一同、一馬を見る。

一馬　……僕じゃないですよ。

房江　あたりまえでしょう、カズさんそんな陰湿じゃないよ。
一馬　いっその事陰湿になって落書きでもすれば、気も晴れて楽になるかなぁ。
正男　やめなよ、カズさんらしくない。
真知子　落書きする勇気もないくせに。
房江　真知子。
一馬　はい。
正男　真知子も言い出したら聞かないから、地道に通ってくださいよ。
真知子　もう来なくて結構。
房江　泊っていってもいいのよ。
一馬　すみません、僕がふがいないばかりに。
房江　真知子だって引っ込みがつかないだけですよ。
一馬　そんなふうに言っていただけると気が休まります。

部屋からマサミが顔を出す。

マサミ　正男ちゃん、吊り棚がまたグラグラ動くのよ。
正男　お気に入りの郁雄に直してもらえばいいんじゃないですか。
マサミ　でも、今にも落ちてきそうなの。
正男　直すぐらい自分でできるでしょう。
マサミ　届かないのよ。

一馬　あぁ、僕が直しましょう。
マサミ　お願いよ。
正男　ほっときなよ。
一馬　小さな事をやり遂げながら自信をつけて大きくなる。今の僕には小さな事が必要なんです。
真知子　おぁ、ごりっぱ。
マサミ　すまないねぇ。

一馬、部屋へ行く。

房江　どうして直してあげないの。
正男　カズさんが直すからいいじゃないか。
真知子　何小さな事にこだわっているの。
正男　俺の事より自分の事考えろよ。
真知子　離婚決定。
正男　じゃないだろう。
真知子　あんな男。
房江　いい所も見てあげなさい。
真知子　修復不能なくらい溝は深いの。
房江　直すこともしないで何が修復不能よ。

真知子　もともと合わなかったのよ。結婚するんじゃなかった。人生台無し。
房江　あの思いやりのある優しい真知子はどこへ行ったんだろうねぇ。
真知子　心配ご無用目の前にいます。
房江　あきれた。
真知子　呆れついでに一言。いつまで貸すつもり？　このままだとこの中道家は、アンポンタンに乗っ取られちゃうわよ。
正男　ぞっとするね。
房江　いいじゃない、いつまでいたって。

部屋から釘を打つ音が聞こえる。

真知子　そのうち、父さんの部屋だった事も忘れるんだわ。
房江　忘れるわけないじゃない。
真知子　あたしは嫌よ。もういないからって、はいそうですかって訳にはいかないじゃない。
房江　おばあちゃん達がいるのがそんなに嫌かい。
正男　母さんは忘れたいんだろう。
房江　何言ってるの。
正男　たとえばあさんに貸して忘れる事ができても、出て行けば又同じこと。あんどんの会なんて子供騙しさ、そのつもりで部屋を貸したとしても何

も変わらない。
真知子　それで貸したの？
房江　そんなんで貸したんじゃないよ。
正男　母さんが忘れたがっている、だってそうだろう、あいつがこの家を駄目にしたんだ。
房江　あいつだなんて。
正男　あいつ以外にどんな呼び名がある。人は呼ばれるに値する呼び名がある。あいつにはあいつで丁度いい。
房江　なんてこと言うんだい。
真知子　どうしてそこまで言わなければならないのよ。言い過ぎよ、兄さん変だわ。
正男　ああ変さ、俺もあいつの血が流れているんだから、そのうちキチガイになるさ。
房江　やめなさい正男。
真知子　兄さん怖いの？
正男　……。
真知子　ちっぽけな事にしがみついているだけにしか見えないわ。
正男　ちっぽけな事？
真知子　そうよいつまでもこだわって。
正男　俺にはこの家が耐えられない、母さんの他人を家にいれる無神経さにも

耐えられないんだよ。俺は他人が耐えられないんだ。

房江　……反対されるのは分かっていたさ。正男にも真知子にも母さん本当は相談したかったんだよ。今回の事だけじゃなく、ほんの些細な事でもお前達に相談したかったんだよ。……父さんが亡くなってから、真知子がお嫁に行き幸せになって、正男もこの家を出て仕事をして立派にやっている。母さん嬉しいよ。お前たちが誇りだよ。お前たちの事を考えながら家の中に一人でいると、時計のカチッ、カチッっていう音が聞こえてきて、あぁ、これが年を取っていくことなんだな、このまま死んでいくんだな。そう思うと無性に誰かと一緒にいたくなって。でも、母さんのまわりには誰もいなくて、寂しいのは年を取ることじゃなく、そばに誰もいないことなんだなぁって思って……父さんの部屋から声がしたらどんなにいいだろう、物音がしたらどんなに嬉しいだろうって、そんな事ばかり考えていて。……ただそれだけだよ、お前たちに相談するべきだったね。

正男　……母さんが決めたならそれでいいよ、もう何も言わない。

真知子　……。

房江　やだね、年を取るとなんだか愚痴っぽくなって。どれ、買い物でも行こうかしら。

房江、出かけようとする。

真知子　待って、あたしも行く。
房江　正男、今日は何にしよう。
正男　何でもいいよ。
房江　家に帰ってきた時ぐらいおいしいものを食べさせなきゃね。（真知子に）行こう。
真知子　うん。

二人、玄関より出て行く。

正男　ちっぽけな事か。……俺は心の広い男じゃないって。……クモかぁ、そんなに似ているかなぁ。

正男、縁側まで来て空を見る。

正男　クモなんかどこにも見えませんよ。……クモのバカかぁ……。

勝手口から郁雄が傘をさして入って来る。

郁雄　シトシトピッチャンシトピッチャン。遅くなりましたー、水も滴るいい

男の郁雄ちゃんが、本日もやって来ましたよー。

郁雄、正男の姿を見て帰ろうとする。

郁雄　シトシトピッチャンシトピッチャン。
正男　おい郁雄、なんで帰るんだよ。
郁雄　あっと、先輩じゃないですか。
正男　何が先輩じゃないですかだよ、上がれ。
郁雄　いや今日はちょっと。
正男　ん？　用事があって来たんだろう。
郁雄　じゃあ上がらせてもらいます。
正男　おう。
郁雄　失礼しまーす。

郁雄、傘を縁側の脇に置き茶の間に上がる。

正男　毎日来ているんだって？
郁雄　やだなぁ先輩、毎日だなんて。まるで下心があるような言い方。
正男　あるんだろう。
郁雄　清廉潔白なこの心、向上心という上を向く心はあっても下心なんてあり

正男　ません。
郁雄　いいから座れ。
正男　はぁ。
郁雄　茶飲むか。
郁雄　頂きます。

正男、湯呑を取ろうとする。

郁雄　あっ先輩、僕のそれ。（自分の湯呑みを指す）
正男　それって、オイオイここはあんどんの会のコーナーだぞ。おまえ入ったのか？
郁雄　入れてくれないんですよ。会員になるには厳正なる審査を経ないと駄目だっていうから、ファンクラブを作ったんですよ。僕はその第一号
正男　正気か。
郁雄　あれ、疑っている。やだなぁ先輩、この真剣なまなざしを見て下さい。
正男　（見てない）ファンクラブって何するんだよ。
郁雄　一、中道家に毎日お邪魔する。二、中道家で毎日お茶を飲む。三、中道家を応援する。以上。
正男　どこがファンクラブなんだよ。
郁雄　気持ちですよ気持ち。湯呑み一つが隣にあるだけで繋がっている気がす

る。ささやかなこの気持ちを分かって下さいよ。

正男　アホか。

郁雄　先輩も入りません？　今なら会長の座を譲ってもいいですよ。何なら二階の先輩の部屋を事務所にしましょう。あんどんの会ファンクラブ事務所。いいじゃないですか。

（無言でお茶を出す）

正男　……いただきまーす。

郁雄　真知子ならいないぞ。

正男　ふーん。

郁雄　カズさんと一緒に帰ったぞ。

正男　えっ！

郁雄　残念だったな、郁雄。

正男　又、冗談きついっすよ。

郁雄　嘘だと思うなら二階見てみろ、荷物ないから。

正男　本当？

郁雄　あぁ。

正男　郁雄ちゃんに何か言ってなかった？

郁雄　何も。

正男　ショック！純真な郁雄ちゃんの心はぼろ雑巾のように投げられ捨てられ踏みつけられ、あぁ、もう立ち直れない。

正男　それぐらいが丁度いい。
郁雄　はぁ、抜け殻。

二人、ぼんやりと雨を眺めている。

正男　そんなにショックか。
郁雄　はい。
正男　お前が羨ましいよ。
郁雄　は？
正男　……。
郁雄　……なんかあの時みたいですね。
正男　あの時？
郁雄　先輩のお父さんのお葬式が終わった次の日だったかなぁ、店からお酒持ってきて二人でへべれけになるまで飲んでいたけど、気が付いたら先輩、縁側に一人座ってぼーっとしていた。
正男　そうか。
郁雄　ええ。
郁雄　僕はその時まちちゃんにふられてのやけ酒だけど。
正男　告白したのか。
郁雄　玉砕です。

正男　ふーん。
郁雄　あの時もこんな雨でした。
正男　俺もいたのか。
郁雄　ええ。
正男　今みたいにか。
郁雄　ええ。
正男　ぼんやりしていたか。
郁雄　していました。
正男　葬式の次の日か。
郁雄　はい。
正男　何考えていたのかなぁ。
郁雄　さあ。

一馬が部屋から出てくる。

郁雄　あっ。
一馬　おっ。
郁雄　入ったんですか。
一馬　え？
郁雄　あんどんの会。

一馬　まさか。
郁雄　そう。
郁雄　まちちゃんと一緒に帰ったんじゃ。
一馬　一緒に帰ります。

郁雄、正男を見るが正男は知らぬふり。

郁雄　先輩。
正男　悪い、真知子は買い物行っているよ。
郁雄　（一馬に）ヨリ戻ったんですか？
一馬　いえ。
郁雄　まちちゃん頑固だからなぁ。
一馬　郁雄さんの方が真知子の事を知っている。

一馬、一緒に座る。

郁雄　知っているだけじゃ駄目なんです。
一馬　知らぬがいいとは限らない。
郁雄　とかくこの世は。
一馬　郁雄さん。

郁雄　はい。
一馬　吊り棚ぐらついていましたよ。
郁雄　本当？
一馬　ちゃんと釘打っておきましたから。
郁雄　若旦那ヤワですみません。
一馬　……写真見ました？
郁雄　おじいさんが写っている古い写真。
正男　カズさんも見た？
郁雄　あれ、ということは。
一馬　どう思います。
郁雄　一致しないなぁ。
正男　写真が嘘か、話が嘘か。
郁雄　どっちが本当なんですかね。
正男　どっちも本当なんだろうな。
郁雄　分からなくなってきました。

雨の音が聞こえている。
正男、台所に立ち日本酒を持ってくる。

郁雄　まだ昼間ですよ。

一馬　お義兄さん。

正男　いいじゃない、飲みたい気分だ。

正男、みんなのコップを出して注ぐ。

一馬　付き合いますか。

郁雄　先輩が飲むとあらば。

正男　飲んで忘れよう。

郁雄　酒屋の若旦那が昼間酒か、たぶん店潰すな。

一馬　企業戦士、いつもなら経済活動の真っただ中。

みんなそれぞれ口をつける。

郁雄　きくなぁ。

一馬　こんなの初めて。

それぞれ思い思いに飲んでいる。

正男　男って小さいよなぁ。

雨の音が聞こえている。

6

数時間後。
真知子が酔いつぶれた男たちに毛布を掛けている。掛け終わるとそばにある空き瓶を何本か振ってみる。
タマも卓袱台の脇に座っている。

真知子　これも空だわ。全くもう、加減ってものを知らないのかしら。

タマもふらつきながら一緒になって片付けはじめる。

真知子　あんどんの方は手伝わなくていいんですよ。
タマ　でも、自分たちが飲んだものですから。
真知子　あら、常識はあるのね。

しかしタマ、とても辛そう。

真知子　無理しなくていいのよ。
タマ　でも。

真知子　もう。……お茶でも飲む？
タマ　頂きます。
真知子　熱いのがいいわよね、今お湯を沸かしてくるから。

真知子、台所に行く。
それでもタマ、散らばった物を片付けている。
真知子、台所から戻ってきてお茶の用意をする。

真知子　休んでなさいよ。
タマ　はぁ。
真知子　見ているこっちが辛くなる。
タマ　そうします。
真知子　（寝ている男たちを見て）幸せな人達だわ。
タマ　楽しかったです。
真知子　無理しないで、嫌だったら断ればいいのに。
タマ　また一緒に飲みたいです。
真知子　呆れた。
タマ　みんな優しい。
真知子　どこがよ。まぁ寝ているときは可愛い顔しているけどさ。

真知子、一升瓶に混じり腕時計が踏まれて壊れているのを見つける。

真知子　ああ～誰のよ。郁雄のかなぁ。まともな飲み方してよ。

タマ　気付きませんでした。

真知子　でしょうね。

真知子、腕時計をつまみ卓袱台に乗せる。

真知子　しーらないっと。

真知子、卓袱台にある湯呑みを見て。

真知子　あら、これ……。

タマ　あぁ、僕が使っていました。

真知子　使ってましたって、あなたのはちゃんとあるでしょう。

タマ　だめですか。

真知子　だってこれは……あんどんの会の人達ってどうしてこんなに図々しいのかしら。

タマ　怒っています？

真知子　もう。

真知子、その湯呑みを取り台所に行く。

タマ　怒っちゃった……（辛そうにしながら横になる）

真知子、台所から洗った湯呑みとポットを持ってくる。

真知子　……。

タマ　湯呑みすみませんでした。

真知子　いいのよ、いつまでしまわない母さんも悪いんだわ。

タマ　いつもの湯呑みでいいです。

真知子　兄さんによく何も言われなかったわね。

タマ　正男さんが使えって。

真知子　兄さんが？

タマ　はい。

真知子　……。

真知子、急須にお湯を入れる。

暫くおいてからお茶を入れる。

真知子　どうぞ。
タマ　あぁ、すみません。（起き上がり湯呑みを見る）あれ、いいんですか？
真知子　いいわ。
タマ　すみません。
真知子　あやまらないで。
タマ　え？
真知子　堂々と使って。
タマ　はい。いただきます。

タマ、お茶を飲む。

真知子　いつもあたしがやっていたの。
タマ　え？
真知子　父さんがそこに座ると、あたしがこの湯呑みを出してきてお茶を入れるの。
タマ　じゃあこの湯呑み。
真知子　父さんのよ。兄さんもどうかしているわ。
タマ　そうだったんですか。……どんな方だったんですか。
真知子　父さん？
タマ　ええ。

真知子　聞いたって面白くないわよ。
タマ　ここに座ってどんな風にお茶飲んでいたんですか？
真知子　黙ってお茶を飲んでいた。
タマ　怖そうですね。（真似る）
真知子　（失笑）喋るのが苦手なだけ。
タマ　はぁ。
真知子　でもお酒を飲むと人が変わったように喋って暴れて。まっ、他人に自慢できる良き父親ではなかったけれど、あたしにとっては一人しかいませんからね。
タマ　好きじゃないんですか。
真知子　うーんどうなんだろう。思い出が少ないからかな。
タマ　思い出？
真知子　微かに覚えている背中の感触だけ。
タマ　背中ですか。
真知子　あたしの話つまらないでしょう。
タマ　いえ、もっと話して下さい。
真知子　おしまい。
タマ　（残念そう）
真知子　あなた変わっているわね。
タマ　へ？

真知子　その年であんどん作りたいだなんて。結構渋い趣味しているのね。
タマ　渋いですか。
真知子　渋いわよ。他にする事ないの。
タマ　他にですか。そうですねぇ……（しばらく考えているが答えは出ない）
真知子　ボケの予防に手先を動かすただのボランティアによく入る気になるわね。あたしならごめんだわ。

タマ、無言でいる。

真知子　どうなの？
タマ　はぁ。……あー大分良くなりました。
真知子　……これで頭痛も治るわよ。

二人、じーっと見つめあっている。

真知子　やっぱりあなた変よ。
タマ　変ですか。
真知子　そこまでして作ろうとする理由が分からない。
タマ　理由・
真知子　ボケ防止のためなんて言わないでよ。

タマ　……。
真知子　あれから随分経つのに一個も作れてないみたいだし、不器用なのは分かるけど。
タマ　……。
真知子　なんか熱意が感じられないのよ。俺は作るぞーとか、必ず作ってやるんだーとか。
タマ　熱意ですか。
真知子　そうよ。
タマ　誰のために。
真知子　は？
タマ　作るんでしょうか。
真知子　そんなの知らないわよ。もう、あの時連れ戻すんじゃなかった。見つけても知らんぷりして、タマは三日も経たないうちに逃げたって事にすりゃ良かった。
タマ　本当に迷ってしまって。
真知子　どっちでもいいわよ。
タマ　あの時はすみませんでした。
真知子　謝るくらいだったらちゃんと作りなさいよ。
タマ　そうしているんですが。
真知子　簡単そうに見えるんだけどなぁ。

タマ　えぇ。
真知子　誰のためでもいいじゃない、考え過ぎよ。何にも考えない方が簡単に作れる時だってあるんだから。
タマ　そうですか。
真知子　そうよ。
タマ　真知子さんには迎えに来てもらったり、勇気づけられたり。
真知子　やめてよ、ただ単に早く出て行って欲しいの。そのためだったら多少の事は目をつぶるわ。
タマ　嫌いですか。
真知子　迷惑なだけ、新しい生活をスタートさせようと思っているのに。
タマ　新しい生活。
真知子　新しい人生とも言うわね。
タマ　いいですね。
真知子　よくないわよ。
タマ　……。
真知子　……。
タマ　雨、やみませんね。
真知子　そうね。
タマ　あのう。
真知子　なあに？

タマ　うどんまだ残っています？
真知子　お腹空いたの？　って、そういえば飲んでばかりで食べてないじゃない。体壊すわよ。死んだら元も子もないんだからね。
タマ　はぁ。
真知子　待っていて、温めてくる。
タマ　すみません。

真知子、うどんを温めに行く。
タマ、縁側まで来て座る。
ひさしが壊れていて、雨漏りがしている。
真知子、居間に戻ってきて卓袱台を拭く。

真知子　濡れるわよ。
タマ　いいんです。
真知子　父さんが作ってから随分経つからなぁ。修理はしたし金はなし。
タマ　正男さんは？
真知子　駄目よ、手をつけようともしないわ。
タマ　ふーん。
真知子　何ならタマ直してくれる？
タマ　え！無理ですよ。

真知子　冗談よ。ひさし直すよりあんどん作る方が先だものね。
タマ　はい。
真知子　風邪ひくわよ。
タマ　ここいいですね。
真知子　父さんのお気に入りの場所よ。
タマ　気に入りました。
真知子　そう。いっその事父さんになりなさいよ、頼りないお父さん。
タマ　からかわないで下さいよ。
真知子　おっかしい。

タマ、濡れている。

真知子　濡れているわ、こっち来なさいよ。
タマ　嫌です。

真知子、縁側の脇に置いてある郁雄が持ってきた傘を広げてタマにさす。

真知子、台所へ行く。

タマ　砂が降っているようだ。

タマ、雨を眺めている。
静かな時間が流れている。
真知子、台所からうどんのどんぶりを持ってきて卓袱台の上に置く。

真知子　できたわよ。

タマ、縁側から動かない。

真知子　タマ、食べないの？　……もう。

真知子、どんぶりと箸を持ち縁側に来る。

真知子　ほら。

タマにどんぶりを渡す。
片手に傘、片手にどんぶりのタマ。
食べられない様子を見ている真知子が、見かねて箸を取りタマに食べさせる。

タマ　いただきます。
真知子　世話が焼けるわね。
　真知子にも傘をさしてやるタマ。
　さましながら食べさせる真知子。
真知子　どう？
タマ　おいしいです。
　雨の音が聞こえている。
　つゆまで全部飲むタマ。
タマ　あ～生き返るようだ。
真知子　よっぽどお腹空いていたのね。
タマ　ごちそうさまでした。おいしかったです。
真知子　いいえ。
　タマからどんぶりを受け取り傍らに置く真知子。
タマ　真知子さんといると嬉しいです。

真知子　そう。ありがとう。
タマ　ずっと一緒にいたいな。
真知子　だめ。あんどん作ったら出て行くの。
タマ　（哀しそうな顔をする）
真知子　そんな顔しないでよ。
タマ　（満面の笑み）
真知子　だめ。
タマ　（怒った顔）
真知子　嫌い。
タマ　迷子になりません、お茶も黙って飲みます、ひさしも直します。……お父さんになります。
真知子　（笑いながら）ばか。

真知子に傘をさしたまま顔を背けるタマ。
真知子、悪戯っぽい顔つきでタマの背中に乗る。

タマ　うわっと！
真知子　はい立って。
タマ　むむ。
真知子　あたしが持つわ。

タマの持っている傘を持つ真知子。
真知子を背負い立ち上がるタマ。

真知子　重い？
タマ　大丈夫です。
真知子　お父さん、庭のほうまで行って。

タマ、かなり頑張っている。

真知子　はやく、お父さん。

タマ、庭の方へ行く。

真知子　あたしが泣いているからあやすように庭をぐるぐる回るのよ。
タマ　んー。
真知子　ちゃんとあやしてよ。
タマ　真知子さん、真知子さん。
真知子　呼び捨て。
タマ　でも。

真知子　いいから呼んで。
タマ　真知子、真知子。（あやしている）
真知子　えーん、えーん。
タマ　真知子、真知子。
真知子　えーん、えーん。

タマ、真知子を背負い庭を周回する。

タマ　真知子、どうした、なんでそんなに泣いているんだ。
真知子　えーん、えーん。
タマ　父さんがいるから大丈夫だぞ。
真知子　えーん、えーん。
タマ　真知子は父さんの宝物だ。父さんみたいな人を好きになって、大きくなったら綺麗なお嫁さんになるんだよ。
真知子　えーん、えーん。
タマ　真知子は幸せだなぁ。
真知子　えーん、えーん。

タマ、耐えきれず砂場の上で止まる。

真知子　もうおしまい？　お父さん。
タマ　んー。
真知子　……あったかい。

タマを強く抱きしめる真知子。
驚くタマ。真知子をおんぶしたまま雨の中に佇む。

7

茶の間で老婆達、タマ、真知子があんどんを作っている。
真知子とヤヨイはタマに手ほどきをしている。

真知子　そうそう、ここをこうやって。
タマ　こうですか。
ヤヨイ　こうよ。
タマ　ははあ。
ヤヨイ　出来たじゃない。
真知子　やるわね。
リュウコ　出来たのかい？
マサミ　骨はいい感じね。
ヤヨイ　次は貼り方いきましょう。
タマ　いきましょう。
真知子　この紙を（和紙を切ろうとする）
マサミ　駄目よ、真知子ちゃんが切っちゃ。
真知子　あたしにも手伝わせてよ。

マサミ　タマがやらなければ意味がないの。
真知子　だから一緒に。
リュウコ　会員じゃなければ作って駄目なことになっているから。
真知子　そんな決まりいいじゃない。
リュウコ　よくないよ。
ヤヨイ　どういう風の吹き回し？　あんなにあたしたちの事嫌っていたくせに。
真知子　全部出来上がったら出て行くんでしょう。ヤヨイさんそう言ってたじゃない。
リュウコ　言ったの？
ヤヨイ　だって。
真知子　硬い事言わないで、あたしが手伝えばその分早くなるでしょう。
リュウコ　駄目よ。
真知子　なんで駄目なの、そんなにいつまでもここにいたいの？
リュウコ　そうじゃないって。
真知子　じゃぁ手伝わせてよ。もうすぐなんでしょう。
マサミ　駄目なものは駄目。
真知子　何よケチ。
ヤヨイ　そんな言い方しないでよ。
真知子　（ヤヨイの袖をつかみ可愛く）何よケチ。
マサミ　（恐怖の顔）

タマ　あの〜次は……。
ヤヨイ　と、次ね。
リュウコ　悪く思わないでね。
マサミ　嫌で教えないわけじゃないんだ。
真知子　気にしていませんから。
ヤヨイ　この木型に沿って紙を貼っていくのよ。
タマ　こうですか。
ヤヨイ　気をつけなくちゃならないのがはみ出ない事。
タマ　こうですね。
ヤヨイ　そうそう。
真知子　こう？

二階からけだるい感じで一馬が降りてくる。

一馬　おはよう。
真知子　やっと起きた。何時だと思っているのよ。
一馬　何時？
真知子　四時過ぎているよ。
一馬　朝の？
真知子　夕方に決まっているじゃない。

一馬　嘘。
真知子　本当。
一馬　みんなは？
真知子　ご盟友どもですか。朝方愛ちゃん来て大変だったのよ。
一馬　は？
真知子　あんな騒ぎになったのに気づかなかったの？
一馬　あんな騒ぎ？
真知子　呆れた。
一馬　夢じゃなかったのか。
真知子　当たり前でしょう。
リュウコ　郁雄ちゃん出入り禁止になったんだよ。
一馬　中道家から？
マサミ　あたし達まで疑われたんだよ。
一馬　疑われた？
マサミ　郁雄ちゃんに色仕掛けでせまっただろうって。
一馬　は？
真知子　（おかしくて笑う）
マサミ　見てないのが残念だね。
リュウコ　タマがいなかったらどうなっていた事か。
一馬　タマが？

マサミ　（タマを真似て）愛さん誤解です。真知子さんはボクとアイシアッテいるんです。
一馬　ええ！
マサミ　その場しのぎよ。
一馬　あぁ。
リュウコ　それで鉾先がこっちに向いたのよ。
一馬　その時俺何していた？
真知子　兄さんと肩組んで笑いながら二階に上がって行ったわよ。よりを戻そうと又とないチャンスだったのに残念ね。
マサミ　愛は遠のくばかり。
一馬　はぁー。
真知子　誓約書を書いたのよ。今後一切中道家には出入りいたしません。
一馬　おぉーこわ。
マサミ　なんだかんだ言って頭が上がらないのよ。
一馬　あんないい奴とは思わなかったよ。そうか、出入り禁止か。
リュウコ　又来るだろうけどね。
一馬　そうですよね。
真知子　何よ、仲良くなったの。
一馬　まぁ。
真知子　どうしてそうなるかねぇ。

一馬　お義兄さんは？
真知子　出かけた。
一馬　いつ？
真知子　お昼頃よ。
一馬　タフだなぁ。
真知子　一時から告別式なんだって。
一馬　告別式？
真知子　朝電話があって、あっけないわよね。
ヤヨイ　ケーキおいしかったな。
一馬　知り合い？
真知子　兄さんの付き合っていた人。
一馬　付き合っていた人？
マサミ　可愛い子だったな。
リュウコ　そうだね。
一馬　そりゃショックだな。病気か何か？
真知子　事故だそうよ。
一馬　事故かぁ。避けられないよな。
真知子　手帳の中に兄さんの事ばかり書いてあって、それで連絡くれたらしいの。
一馬　（手で顔を覆いながら）ふーん。
真知子　顔洗ってきたら。

一馬　そうする。

一馬、顔を洗いに行こうとする。
玄関から房江が帰ってくる。

房江　ただいま。
真知子　お帰り。
リュウコ　ちゃんと返せた？
房江　返せたわよ。
マサミ　よかった。
房江　あらカズさん、今起きたの？
一馬　おはようございます。

房江、茶の間に来る。

ヤヨイ　お帰り。
タマ　お帰りなさい。
房江　ビール貰っちゃった。
リュウコ　靴下返しに行っただけで？
真知子　どういう事？

房江　今朝の事なんか全然気にしてないみたい。
リュウコ　あんなに怒っていたのに？
房江　愛ちゃんはそういう人よ。
真知子　出来た人だなぁ。
房江　おおらかなのよ。おばぁちゃん達にもよろしくって。
リュウコ　あたしらにも？
房江　ええ。
マサミ　郁雄ちゃんは？
房江　まだ寝ているみたい。
真知子　だろうね、時計の事も気付いてないんでしょう。
房江　高そうな時計だったのにね。
真知子　自業自得。

一馬、茶の間に入ってくる。

一馬　おぼろげながら夕べの記憶が。
リュウコ　どれくらい飲んだの？
一馬　三人で一升かな。
真知子　片付けたら一升瓶が二本、焼酎の小さいのが三本、ウイスキーが一本、その他ビールの空き缶が散乱していましたけど数えていません。

房江　途中で買いに行ったんだ。
真知子　呆れてものも言えません。
房江　愛ちゃんからビール貰ったのよ、飲む？
一馬　いえ、お酒はもう。
真知子　全く。
一馬　あれ、（茶封筒の上にある携帯電話を見て）着信ゼロ、こんなこと初めて、感動的だなぁ。
真知子　有休取って休みでしょう。
一馬　とは言っても、二十四時間三百六十五日いつでもどうぞがうたい文句だからなぁ。
真知子　クビじゃない。
房江　あら、どうしましょう。
一馬　そうなのかなぁ。
真知子　あたしなんかに関わっているからよ。
一馬　クビかぁ。と、頭痛が。
リュウコ　仕事に戻ったら。
一馬　真知子、二日酔いの薬あるか？
真知子　どっちの心配しているのよ。
一馬　二日酔い。
真知子　もう。

真知子、茶箪笥から薬箱を取り出し、中から錠剤を取り一馬に渡す。

真知子　はい、二つね。
一馬　ありがと。ビール冷やしておきますか。
房江　そうね、お願い。
真知子　飲むの？
一馬　冷やすだけだよ。

一馬、台所に行き薬を飲む。

ヤヨイ　房江さん、これタマが作ったのよ。
房江　あらタマ、上手じゃない。
マサミ　まだ木枠だけど上手なもんだ。
タマ　才能です。
真知子　一気に開花ね。
ヤヨイ　教え方がいいのよ。
房江　これでたくさんできるわね。
リュウコ　うん。
一馬　布団あげてくる。

一馬、欠伸をしながら二階に上がる。

ヤヨイ　あれ、糊がない。
マサミ　あるわよ。
ヤヨイ　どこ？
マサミ　そのへんにない？
リュウコ　もうなくなったか。
ヤヨイ　ないわよ。
マサミ　よく探した？
ヤヨイ　探している。
リュウコ　あぁ、なくなるころか。
ヤヨイ　これ最後だったんだ。
リュウコ　房江さん、すまないが糊貸してくれんかな。
房江　いいわよ。

房江、茶箪笥の引き出しを開けて探すが見当たらない。

房江　ないわねぇ、ご飯粒じゃ駄目かしら。
真知子　二階にあるわよ。

ヤヨイ　本当？
真知子　ちょっと待っていて。
リュウコ　ごめんね真知子ちゃん。
真知子　いいのよ。

真知子、二階に上がる。

マサミ　そんなに作った？
リュウコ　そうみたい。

茶の間の電話が鳴る。
房江、受話器を取る。

房江　はい中道。あら愛ちゃん先ほどはどうも。え、あらやだ本当だ。ええ、今伺います。わざわざどうも。（受話器を置き）はーまた忘れてきちゃった。
リュウコ　又？
房江　ビール貰う時、下に置いたのがいけなかったんだわ。
リュウコ　今日は何？
房江　天ぷらの材料。

リュウコ　あたし行って来る？
房江　今度こそあたしが行かないと。真知子が何て言うか分からないから、適当にごまかしておいて。
マサミ　分かったよ。
房江　やだよ、本当に。

房江、玄関より出て行く。
真知子、二階の窓より空を眺める。

真知子　カズ、そんなの後にしてちょっと来なさいよ。

一馬、二階の窓より真知子と顔を出す。
夕焼けが家全体を赤く染め上げている。

真知子　ほら。
一馬　おぉ。
真知子　きれいね。
一馬　あぁ、きれいだ。
真知子　あんなに真っ白だったクモが、真っ赤に染まっている。
一馬　真っ赤っかだな。

真知子　泣いているみたい。
一馬　クモが？
真知子　うん。
一馬　そうも見えるか。ずっと仕事に追われていたからな、こんな気持ちは久しぶりだ。
真知子　カズも泣いているの？
一馬　真知子が戻って来なくてな。
真知子　どうして戻って来ないの？
一馬　すれ違いが多くてさ、俺の事嫌いになったんじゃないかな。
真知子　ふーん。
一馬　どうすればいいのか。
真知子　大変ね。
一馬　あぁ。
真知子　いっその事諦めたら。
一馬　そんな事するか。
真知子　甲斐性があるんだから、他にいい人見つけなさいよ。
一馬　あほか。
真知子　諦め悪いわね。
一馬　惚れた女だからな。
真知子　それじゃぁしょうがないわね。

一馬　あぁ、しょうがない。
真知子　真知子って女もしょうがない。
一馬　……なぁ、戻って来いよ。
真知子　嫌。
一馬　そんなこと言わず。
真知子　黙って、ずっと見てましょうよ。

真知子と一馬、夕焼け空を見ている。

タマ　（なにげに外を見て）あっ。
ヤヨイ　どうしたの？　あっ。
リュウコ　ん？
マサミ　おぉ。

タマ、縁側まで来る。

マサミ　タマ、立っていると見えん。座れ。
タマ　あっ、すみません。（座る）
ヤヨイ　きれいね。
マサミ　泣けてくるな。

リュウコ　生きている人にも死んでいる人にも平等にきれいだな。
マサミ　そうだな。
リュウコ　なぁマサミちゃん、そろそろかも知れんな。
マサミ　そうか、そろそろか。
ヤヨイ　まだよ。
リュウコ　ヤヨイちゃん。
ヤヨイ　……。
リュウコ　タマももうすぐ。
ヤヨイ　タマはまだよ。
マサミ　一つでも作れれば十分だ。
ヤヨイ　あたしここが気に入っているの。
マサミ　気持ちは分かるが、そうもいかんだろう。
ヤヨイ　そうだけど、房江ちゃん何て言うかな。
リュウコ　分かってくれるさ。
マサミ　うん。
リュウコ　あたし達は仕方ないんだよ。

あんどんの会の人達は、夕焼け空を見ている。
やがて、夕焼け空は次第に暮れかかってくる。

8

数時間後。
誰もいない茶の間。
部屋から房江が飛び出して来る。
続いて老婆達が出て来る。

リュウコ　房江ちゃん。
房江　……。
マサミ　それは無理だよ。
房江　……。
ヤヨイ　ねぇ、房江ちゃん。
房江　そんな事急に言われたって。
リュウコ　でも。
房江　なんで出て行かなければならないのよ。
ヤヨイ　あたし達だってずっといたいのよ。
房江　じゃあいてよ。
リュウコ　いつかは出て行かなければならないのだし。
房江　それは分かっているけど。

マサミ　ごめんね。

作りかけのあんどんを手に持ち出て来るタマ。

房江、タマを見て。

房江　タマも行くの？

リュウコ　一緒だよ。

房江　タマ、ここにいていいのよ。

タマ　でも。

房江　タマだけでもここにいるといいわ。

リュウコ　分かって頂戴。

房江　紙を貼るだけでしょう、一緒に手伝ってあげる。

リュウコ　（強く）房江ちゃん。

房江　……。

ヤヨイ　（リュウコとマサミに）ねぇ、どうする？

リュウコ　ヤヨイちゃん、分かっているだろう。

ヤヨイ　でも。

マサミ　ヤヨイちゃん。

ヤヨイ　うん。

房江　あたしは分からないわ。出ていったて又部屋を探さなきゃならないんで

しょう。だったらここにいたらいいじゃない。
リュウコ　そういう訳にはいかないんだよ。
房江　気に入らない事があるなら言ってよ直すから。
リュウコ　そういう事じゃないんだ。
房江　どういう事なのよ。
リュウコ　とにかく、行かなけりゃならないんだ。
房江　……。やだ、あたしったら、二度と会えなくなる訳じゃないのに。おばあちゃん達の都合も考えないでいい年してわがまま言って。行く日が決まったら教えて頂戴、盛大にお祝いするわ。
リュウコ　そんな事しなくていいんだよ。
房江　させてくれてもいいじゃない。
マサミ　行きづらくなるわ。
リュウコ　何もしなくていいんだよ。
房江　何よ、もう来なくなるような言い方して。
マサミ　房江ちゃん。
房江　又会えるわよね。

老婆達、互いの顔を見あう。

房江　行先教えて頂戴、こっちから会いに行くわ。

誰も答えない。

房江　行き先ぐらい教えてくれたっていいじゃない、水臭いわよ。決まってないんだったら、決まってからでいいわ。

リュウコ　房江ちゃん。

房江　明るく送り出さなきゃね。

房江、台所に行く。

水を大量に流す音が聞こえる。

マサミ　言わないほうが良かったかな。

リュウコ　分かってくれると思ったんだけど。

マサミ　大丈夫かな。

リュウコ　さ、あんどんを作ろう。あたし達にはそれしかできないんだから。

マサミ　タマももうすぐ出来るな。

タマ　はい、あとちょっとです。

リュウコ、マサミ、タマ、部屋に戻る。

ヤヨイ、台所を見ているが後を追うように部屋へ戻る。

二階から大きな鞄を持った一馬が降りて来る。

一馬　お義母さん、どうしたんですか。水出しっ放しじゃないですか。

一馬、鞄を下ろし台所に行く。
水の音止まる。
房江の肩を抱きかかえながら茶の間に入ってくる。
二階の窓を開け、真知子が寂しそうな表情で外を見ている。

一馬　さ、座って下さい。

房江を座らせる。

房江　ごめんねカズさん。

一馬　疲れているんじゃないですか、少し休んだほうがいいですよ。

房江　大丈夫よ。考え事してたらぼーっとしちゃって。（一馬の服装を見て）行くのかい。

一馬　ええ、今しがた同僚から電話がありまして。どうもトラブってるようで。

房江　じゃぁ早く行かなきゃ。

一馬　お布団敷きましょうか。

房江　あたしならもう大丈夫よ。
一馬　でも。
房江　真知子もいるし。
一馬　はぁ。
房江　真知子は？
一馬　変わりありません。
房江　そう。……さ、早く行かないと。お仕事で迷惑かけちゃう。
一馬　お義母さん。
房江　さぁ、みんながカズさんの事待っているわ。
一馬　……。
房江　次はいつ来るの？
一馬　（房江から目をそらす）
房江　……。
一馬　僕の力不足です。すみませんでした。

深々と頭を下げる一馬、頭を上げると辛そうな表情で房江を見る。

一馬　さようなら。
房江　待ってよ。

立ち上がり、引き留めようとする房江。
一馬、鞄を持ち玄関から出て行こうとする。

房江　真知子！　カズさん行っちゃうよ！

二階から返事はない。
出ていく一馬。
二階の窓には硬い表情の真知子。

房江　カズさん……。

なすすべもなく見ている房江。

房江　真知子ったら、カズさん行っちゃったよ。

真知子は手すりにもたれ天を仰ぐ。
房江、茶の間に来て座る。

房江　どうしてみんな行っちゃうのよ。もう何もかにも嫌になっちゃったよ。

房江、卓袱台に突っ伏す。
暫くすると、勝手口から礼服に黒ネクタイをした正男が入ってくる。
正男、房江の様子を暫く眺めているがやがて縁側に座る。
房江、様子に気付き顔を上げる。

房江　やだね、いつの間に来ていたんだい。
正男　庭、大分荒れているな。
房江　手入れしてないからね。
正男　（ひさしを見て）雨漏りするよな。
房江　どうしたのよ急に。
正男　あちこち直さないとな。
房江　まだお酒抜けてないの？
正男　もう大丈夫だよ。一事はどうなるかと思ったけど。
房江　愛ちゃん来たの覚えている？
正男　だから上に逃げたんだよ。
房江　郁雄ちゃん出入り禁止よ。愛ちゃんに誓約書まで書かされて。
正男　たかが紙切れ一枚で大人しくしているかね。
房江　そりゃそうだけど。
正男　真知子とカズさん上？
房江　カズさん行っちゃった。

正男　そう。忙しそうだからな。
房江　もうここには来ないよ。
正男　え？
房江　カズさんはやり直したがっていたけど、真知子があれじゃぁ。
正男　本当に出て行ったの？
房江　ついさっき。
正男　止めなかったの？
房江　止めたさ、でもどうしようもないじゃない。結局二人の問題なんだから。
正男　そうだけど……そうか。
房江　真知子はばかだよ、不満なんて誰だってあるさ、あんなにやさしいいい男他にいないじゃない。失ってから気付くのは真知子の方だよ。目の前の人とちゃんと向かい合うことができなくて、何が新しい人生だい。真知子はばかだよ。
正男　……。
房江　何か用事があって来たのかい。今日も泊っていくの？
正男　用事がなくちゃ来ちゃいけない？
房江　そんな事ないだろう、正男の家なんだから。
正男　俺の家か。
房江　そうだよ、ここは正男の家なんだよ。
正男　どれ、我が家に失礼。

正男、茶の間に上がり部屋へ行く。

房江　どうしたのよ。

正男、ふすまの前に立ち声をかける。

正男　あんどんの会の方々、ちょっといいですか。

マサミ　（声だけ）はいよ。

正男　中入っていいかな。

マサミ　（声だけ）どうぞ。

正男　開けるよ。

正男、ふすまを開ける。

正男　うわ、すごいね。売ったら儲かるんじゃない？

リュウコ　（声だけ）売り物じゃないの。

正男　もったいないなぁ。で、こんなにたくさん作ってどうするの？　誰か買う人いるの？

リュウコ　（声だけ）あぁ。

正男　へぇー、全部でいくつあるの？
リュウコ　（声だけ）さぁ、数えてみたら。
正男　いいよ。タマ、作ったのか？
タマ　（声だけ）もうすぐで完成です。
正男　やるな、見直したよ。
タマ　（声だけ）どうも。
正男　夕べは楽しかったよ。
タマ　（声だけ）はい。
正男　又飲もう。
リュウコ　（声だけ）正男さん、お悔やみ申し上げます。
正男　ありがとう。由紀も喜んでいるよ。
リュウコ　（声だけ）あたし達そろそろここを出なきゃならない。
正男　無理に出ていく事ないだろう。
リュウコ　（声だけ）房江ちゃんにも言ってあるし。

正男、房江を見る。

正男　本当？
房江　うん。
正男　部屋が狭かったら俺の部屋であんどん作ってもいいんだぜ。

リュウコ　（声だけ）ありがとう、その気持ちだけ頂くわ。
正男　遠慮するなよ。
リュウコ　（声だけ）正男さん、ありがとう。
正男　なんだよ、神妙な顔して。どうかしたの？
リュウコ　（声だけ）ううん。
正男　そう。……じゃ。

正男、ふすまを閉める。

正男　出ていくって、どこ行くんだろう。
房江　教えてくれないのよ。
正男　あんなにいっぱいのあんどん、誰にあげるのかな。
房江　さぁ。
正男　喧嘩でもしたの？
房江　してないわよ。それよりさっきから変よ。
正男　何でもないよ。……母さん、父さんと一緒になって幸せだった？
房江　何よ急に、この子ったら。
正男　どうだった？
房江　いいじゃないそんな事。
正男　答えてよ。

房江　幸せだったに決まっているじゃないの。
正男　そう。
房江　父さんあんな人だったから、お前達には辛い思いさせたけれど、父さんなりに一生懸命だったよ。それはお前が一番知っているだろう。もちろん全部が全部幸せだったとは言えないけど、一緒になって良かったよ。
正男　そうか、安心したよ。
房江　おかしな子だね。告別式でなんかあったの？
正男　行ってない。
房江　行ってないって、間に合わなかったのかい。
正男　そうじゃない、行かなかったんだ。
房江　行かなかったって、行くために出かけたんでしょう。
正男　気が変わった。
房江　大事な人だったんだろう。
正男　あぁ。
房江　ならどうして。
正男　由紀は分かってくれると思う。
房江　もう、何考えているのよ。おばあちゃん達だってあんたの事心配していたんだよ。ついこの間会ったばかりの人なのに、なんで死んじゃうんだろうって。あんなに可愛い子だったのに、一緒にケーキ食べて紅茶飲んだ事がみんな忘れられないのよ。どうして大事な人が先に死んじゃうん

だろうって。あたし達でさえこんなにショックなのに、お前の事を、由紀さんの事を、みんな大事に思っているんだよ。なのに何故行かなかったんだい。

正男　夕焼けきれいだったな。見た？

房江　夕焼けの話なんかどうだっていいじゃない。

正男　見てないの？

房江　ん、んん。

正男　見てないのか。

房江　夕焼けだったのは分かるけど、天ぷらの事考えていたから。

正男　天ぷら？

房江　もう、人の話聞きなさい。

正男　聞いたよ。天ぷらがどうしたって。

房江　はぁ。晩御飯食べた？　食べてないんだったらあるわよ。ナスがおいしいんだから。

正男　いや、いいよ。

房江　遠慮しなくていいのよ。

正男　大丈夫だよ。

房江　そう、おいしいのに。

リュウコ、ふすまを開け顔を出す。

リュウコ　房江ちゃん、ちょっといい？
房江　何？　（そっぽを向く）
リュウコ　来てくれる？
房江　何よ。
リュウコ　手伝って欲しいんだけど。

房江、しぶしぶ部屋へ行く。
正男、縁側に腰掛ける。

正男　……由紀、お前はみんなから愛されていた。そして愛されている事をお前は知っていた。俺は由紀をこの家に連れてくるつもりなんて全くなかった。なのにお前は俺のいない時勝手に上がり込んで、まるで付き合っているかのような話をしていく。初めて会った時も社交辞令のつもりでいつでもどうぞって名刺渡したら、次の日にはもう来てた。お前はそういうやつだ。了解なしでどんどん入ってくる。お前は俺にとって最も嫌いな他人だ。だから俺は決めた。お前とは付き合わない、付き合えない。都合のいいように利用して、都合のいいようにさよならする。それでいいって。俺はお前を憎んでいた。最も嫌いな他人としてお前を憎んでいた。……海を眺めながら、公園のブランコに乗ってそんなことを

考えていたら、夕焼けがきれいでさ。クモが真っ赤に染まっていた。……その時気付いた。俺が最も嫌いな他人は自分なんだなって。俺は、お前が嫌いだったんじゃなく、自分が嫌いだったんだ。……由紀。……父さん、父さんもそうだったんじゃないかって。俺が父さんを嫌っていたように、父さんも俺の顔を見るたびに、最も嫌いな他人、いや自分を感じていたんじゃないか。……俺も父さんも他人を愛したかったけど、どうしていいのか分からなかったんだよな。あの時、この砂場にあんなにたくさんの砂を入れたのは、自分自身がただ、愛のカタマリになりたかっただけなんだろう。

正男、泣き崩れる。

暫くすると部屋のふすまが開き、老婆達が出て来る。

老婆達はあんどんをいくつか抱えて、家のあちこちに置いていく。

置いたあんどんには火が灯されていく。

リュウコ　さぁ、正男さん。

顔を上げる正男。

リュウコ、あんどんを正男に手渡す。

リュウコ　自分の手で、この家に置くんだよ。
正男　え？

マサミ、ヤヨイ、タマ、房江が家のあちこちにあんどんを置いている。

正男　母さん。
房江　おばあちゃん達があたし達にって。

正男、縁側にあんどんを置く。
マサミ、ヤヨイ、タマ、部屋からあんどんを運び出し、家中に置いてまわる。
正男、房江も部屋からあんどんを運び出し家中に置いてまわる

リュウコ　さ、庭にも。

庭にもあんどんが置かれ火が灯される。
二階から真知子が降りて来る。

真知子　どうしたの、これ。

房江と正男の顔は、優しく真知子を見ている。

真知子　母さん、兄さん……。

真知子、呆然とみんなの作業を見ている。
やがて、すべてのあんどんが家中に置かれる。
家中に置かれたあんどんは、静かな灯りをゆらめかせ、家そのものが灯っているようだ。

リュウコ　これで全部だね。
マサミ　そうよ。
ヤヨイ　さ、タマ。

タマ、真知子に近寄る。

タマ　これを。

タマ、手にしていたあんどんを真知子に手渡す。
受け取る真知子。

真知子　これは。
タマ　僕が作りました。ずっと、持っていて下さい。
真知子　あたしに？
タマ　はい。
真知子　……。
リュウコ　さぁ、そろそろ行こう。
房江　リュウコちゃん、マサミちゃん、ヤヨイちゃん、タマ。……ありがとう。

リュウコ、マサミ、ヤヨイ、タマ、微笑み返し、砂場の方へ歩き出す。

真知子　まだ行かないで。

あんどんの会の人々は砂の中へ帰っていく。
家中に灯っているあんどんの灯りの中、見送る房江、正男。
真知子、一人佇む。

幕